

568-473

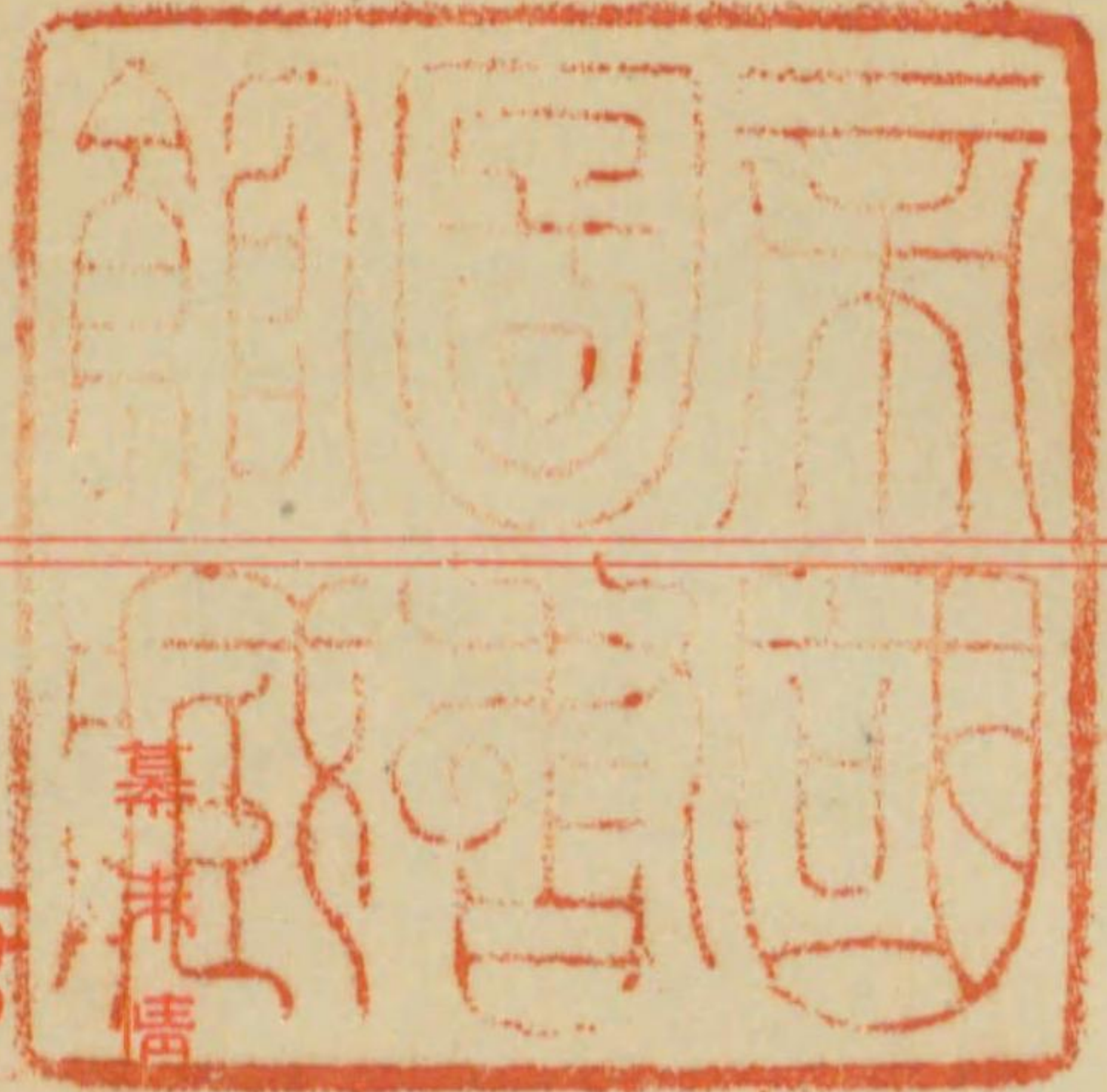


1200501516098

568
73



~~SECRET~~



唐

幕
情

艷
秘
史

人

お

才

村
松
梢
風
著

版房書倉千



568-473

11 12



序

翡翠のやうに青い長崎の海。郡羊臥したるとき山々。鶴の港といふ市街の
羽ばたき——。出島は雨に煙り、南蠻寺の鐘夕暮の空に絲を曳けば、唐人屋敷
には胡弓の音が咽び泣く。

此の地に伴天連は聖の血を流し、支那人は丸山の廓に、黄金の榮華に耽溺す
る。山陽詩を賦し、ロチは文を作れり。

西海の港長崎は古來悲戀に富むと云はれるが、爰に記す唐人お才の物語ほど、
未だ世に知られずして、而も哀れ深きものはあるまじと、作者みづから萬斛の

涙なみだをそゝぎつゝ、此この書しよを世よにおくるものである。

昭和九年晩秋

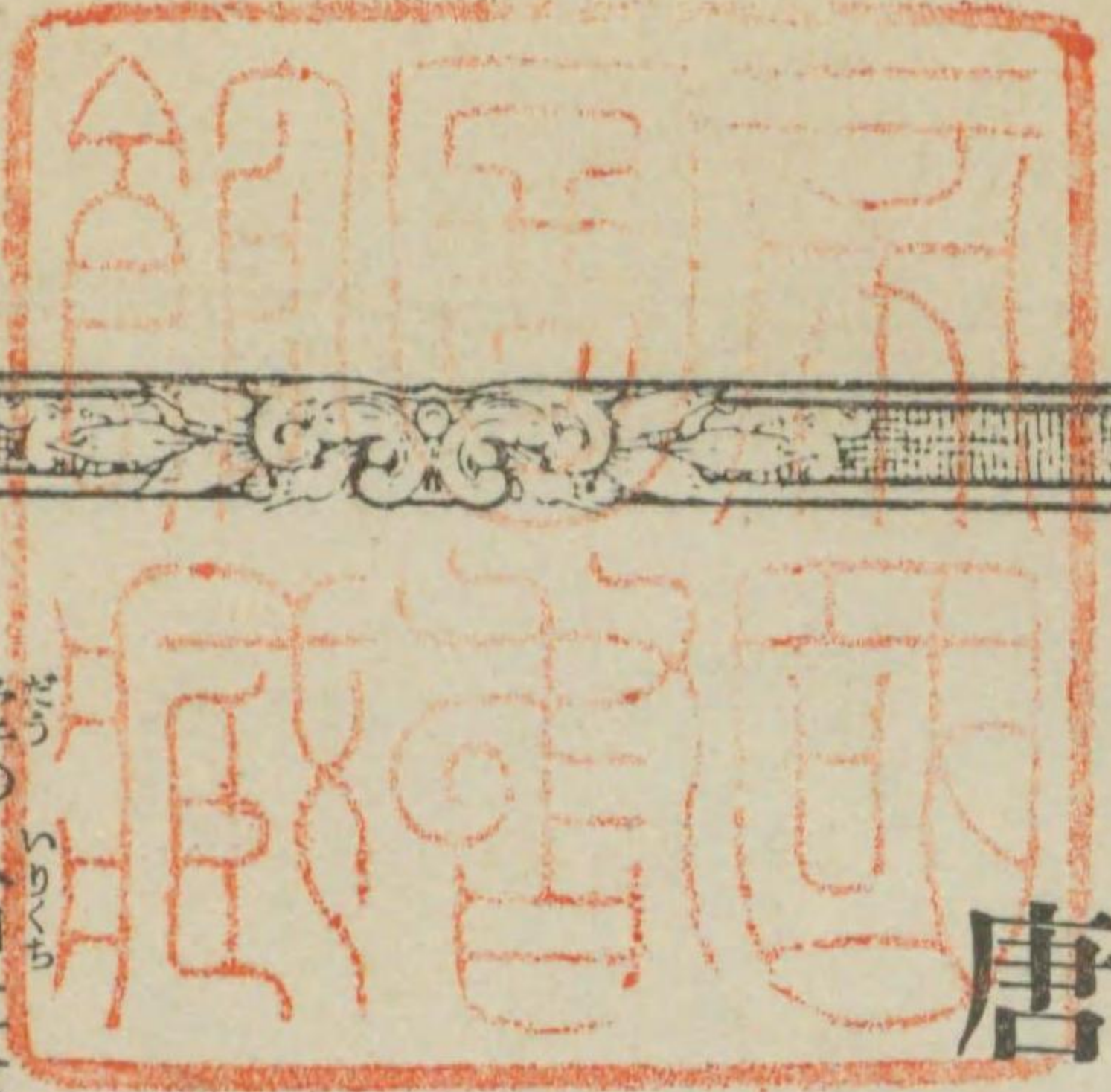
村松梢風誌す

唐人お才 目次

岐	仇	高	或	切	女	風
れ			る	支	貿	頭
			犠	丹	易	山
路	花	島	牲	島	商	の
.....	事
.....	件
(一九—二五)	(二四—二九)	(九五—一四八)	(七一—九五)	(四—七)	(二五—四)
						(一一—二四)



狂	夜	ホテル・ハリマヤ	雲	天	甦	俵
亂	嵐	嶽	仙	草	生	屋
.....	地藏
(四四〇—四五〇)	(四一六—四四〇)	(三九九—四二五)	(三五五—三九八)	(三二—三五五)	(三〇五—三二三)	(一五三—三〇四)



幕末情艶秘史

唐人お才

風頭山の事件

(一)

堂の入口には、『玄妙洞』と墨で書いた板の額が懸つてゐる。文字は支那人でも書いたらしい重厚な筆蹟だが、筆者の名前は入つてゐない。堂内はやゝ八疊敷位の廣さがあるが、僅かに入口を除くの外は四方全部厚い壁で圍はれ、床にも石が敷いてある。天井は張つてなく、直接に屋根裏の木が見えてゐる。けれどもそれらのすべての部分は、一面

に線香の煙や油煙のために鐵のやうに黒くなつてゐる。一步此の堂内へ入り込むと、ヒヤリとした空氣と、一種異様な匂ひが漂ひ籠めてゐて、急に人間の世界から隔絶したやうな、無氣味な氣持に襲はれる。蠟燭の火がユラ／＼燃え上つてゐる。

正面に祭壇があるが、其處に何が祀つてあるのか暗くて見えない。

それは長崎の町に接した風頭山の山續きの一つの谷間に造られてある堂だつた。

堂の主に、白髪白髯で小兒のやうな赤ら顔をした翁だが、齡などは誰も知つてゐる者はない。知らぬと云へば、世間では其の人の名前さへ本當は知らなかつたのだ。普通、「玄妙さん」と呼ばれてゐたが、考へてみるとそれは玄妙洞といふ堂の名で、本人の名前ではなかつた。そして、佛僧だか、道士だか、行者だか、仙人だかそれも判然しないのだ。まだ不思議なことは、日本人だと云ふ人もあれば、吾清國人だと云ふ人もある。そんな風で、まるで素性も得體も知れないけれども、別段それを不思議ともせず、「風頭山の玄妙さん」と云へば、長崎では可成り有名で、信者も相當あるのだつた。病人で

もあつて御祈禱を頼めば御祈禱をしてくれるし、占ひを頼めばそれも見てくれるし、奇體に的中するといふ評判だ。

堂の一隅に粗末な木の臺が置いてあつて、玄妙さんは寒中でも蒲團なしで其の木の臺の上に寝てゐるのだつた。

石の床の上に、藁で作つた圓座が三つばかり並べてあつた。其の中央の圓座の上に玄妙さんは坐つて、一心に祈念してゐた。三尺ばかり離れた右隣には、一人の女が圓座の上に跪いて、頭を床の近くまで下げてゐた。

暫くすると玄妙さんは、女の方へ體を向けて、

「氣の毒だが、この病人は回復らぬわい。」

と云つた。

『えッ。』

女はびつくりしたやうに頭を上げた。まだうら若い娘だ。

『本復らぬが、然し死にはせぬ、病氣は中風だらうの。』

『はい。』

『大事にしないで。』

と云つて、玄妙さんは蠟燭の光で娘の顔をしげしげと見て、

『お前さんも、これからいろ／＼な事があるよ。』

『………』

娘には其の言葉の意味が解せなかつたので、無言の儘叩頭をして、それから帯の間から紙に包んだ物を出してそつと前に置いた。

『有難うございました。』

娘は、堂を出て外の空気に觸れると、暗い運命の窖からでも脱れ出たやうにほつとした。山の草木は青ばんで、空から落ちる太陽の光が、彼女の美しい顔を生き／＼と甦へらせた。

(11)

處どころに櫻の花が咲いてゐた。春は宇宙いつばいに盈ちてゐた。

三面山嶽で囲まれてゐる長崎の町と、其處へ奥深く入り込んで來てゐる海とが、一枚の繪のやうに靜かに脚下に廣がつてゐた。其の上空を鳶が長閑に舞つてゐる。

段々になつた草原の上に尻をおろして、若い二人の武士が、この風光を觀賞してゐる。港内には、軍艦や、蒸氣船や、唐船、和船、といろ／＼の船が澤山碇泊してゐる。

出島や大浦の居留地の建物の屋根の上には、彩られたそれ／＼の國旗が、海の風に翩翩としてゐる。

『佳え景色だなあ。』

と、薩摩緋の筒袖に小倉袴をはき、朴齒の下駄をはいた脚をニュツと突き出してゐる男は、感に堪へぬやうな調子で云つた。

『そりや、鹿兒島よりはよか。』

『鹿兒島もえゝぞ。』

『馬鹿云へ、鹿兒島と長崎では比べ物にならんわい。景色ばかりぢやない、鹿兒島は日本の田舎だが、長崎は世界の人間が集まつてゐる都會だ。』

薩摩緋も、其の理窟は肯定しなくてはならなかつたと見えて一寸黙してゐたが、

『然し藤岡、俺や昨日大浦の邊を歩いて見たが、毛唐人が立派な家を建ててくさるには全く驚いたわい。外國人の勢力が斯う強くなつては、我國は仕舞はどうなるであらう？』

『どうなるかな。』

『捨て、置かば、日本は外國に蠶食せられるの外はあるまいと思ふ。だから、さうならぬ先に、攘夷を斷行する必要がある。』

『攘夷が出来るかな、我國の力で。』

『現在では出来ぬ、もつと國力を養はねばならぬ、それには、腐敗した幕府の政治では駄目だから、王政復古をして、日本中の人間が一つ心になつて當れば、攘夷も出来ぬことはない。』

日本中の青年の心を擱んでゐる、其の時代の一番大きな思想の潮流。この若い武士も其の流れに棹さす一人である。

『河野、君は長崎へ来て、何を目的なのだ。』

『別段これといふ目的もないが、海援隊へでも入つて見ようかと思つてゐるのだ。國を出る時、小松帶刀さんから、海援隊の隊長の才谷梅太郎——坂本龍馬といふ人に紹介狀を貰つて来てゐるのだ。』

『坂本に會つたのか。』

『いやまだ會はぬ、昨日訪ねたが留守だつた、今日でも又訪ねて見ようと思ふ。』

と薩摩緋の青年は云つた。もう一人のはうも、年頃は同じ位だが、りゆうとした羽織袴で、洒落た雪駄をはいてゐる、女のやうに色の白い美男子だ。それは長崎の薩摩屋敷

に勤務してゐる藤岡民彌といふ男で、一人は河野正克といつて、同藩の二男生れで民彌とは竹馬の友だが、まだ長崎へ来て三日目である。

『あれが丸山よ。』

左方の、低く圓味を持った山の上に立ち並んでゐる麓を指差して、民彌は云つた。

『丸山とは何か？』

『ハハハハハ、長崎の丸山を知らず、天下の形勢を論じても駄目だ、今日は俺が案内しよう。』

相手は何處迄も眞面目だ。

『其處に何かがあるのか？』

『何でもある、日本の形勢も分るが、清國の事でも、西洋の事でもすべて分つて来る、天下の志士になるには、先づ丸山から研究しなくては駄目だよ。』

民彌は意地の悪さうな薄笑ひを浮かべてゐた。

其の時、二人が腰を卸してゐる前の細徑を向うから歩いて來たのが、玄妙洞から出て來た娘であつた。

娘は、武士の姿を認めると、『はッ』としたやうに立停つたが、他に路はなかつたし、急に後戻りするわけにもいかないから、おづくした足取りで進んで來て、二人が足を投げ出してゐる前を小腰をかゞめて通り過ぎた。

軽い脂粉の香が、草の匂ひとまじつて跡へ残つた。紅い布を掛けた島田鬚の首が、緋鹿の子の襟の中から抜け出してゐる。

侍達は、思はぬ女性の出現に、暫く話をやめて其の後を見送つた。

(三)

丸山の方から五六名の外國の水兵が勢よく山路を登つて來た。彼等は皆まつ紅な元氣のいゝ顔をしてゐた。然し其の足取りから見ると可成り酔つてゐるやうであつた。

軍歌を歌ふ者もあれば、口笛で遠い祖國の流行唄を奏で乍らやつて来る者もあつた。初めて見る東洋の珍らしい港と、三月の好季節と、もう一つは彼等のポケットをうんとふくらませてゐるダラ銀の重味おもみが、彼等を滅茶苦茶に愉快にさせてゐた。それは目下長崎へ入港してゐる英艦イケレス號の乗組員だつた。

水兵達は、山の上から下りて來た娘とバツタリぶつかつてしまつた。娘は急いで道の横へ避けた。そして態と水兵達の方から視線をそらして、太陽を仰いで眩しさうに瞬きした。

水兵達は急に素晴らしい物を發見したやうな氣持になつて噪ぎ出した。酒の力と多數の勢とが、實際以上に彼等を亂暴に導く恐れがあつた。けれども此の場合は、相手の娘が彼等の眼に驚く程美しく映じたことが、禍の重大原因だつた。

『ヘロウ！ ムスメサン。』

一人の水兵は二三間先からさう聲を掛けた。娘は知らん顔をしてゐた。

やがて水兵達は、娘を取り巻いて口々に何か云ひ出した。健康な櫻色の皮膚が、強烈に彼等の本能を刺戟した。娘がひどく困惑して横を向いてゐる、その東洋的の黒瞳も、異常な魅力をもつてゐた。

一人の水兵は、突然娘の手首を捉まへ、それへ自分の口を持つて接吻しようとした。娘は蒼くなつて仰天した。

『アレエー』

水兵達は面白がつてゲラ／＼笑つた。

其の時、山の上の方から飛んで下りて來たのは、河野正克といふ、薩摩緋の筒袖を着た若い武士だつた。

『ノウ／＼。』

正克はたつた一つ知つてゐる英語でさう云つて、手を振つて水兵達の亂暴を制止しようとした。其の顔は最初のうちは微笑をさへ含んでゐた。然し水兵達にはそれが半ば好

意的に止めてゐるのであることは解らなかつたのだらう。彼等は急に險惡になつた。そして早口の英語で口々に罵り出した。

一人の水兵はいきなり正克に向つて來た。大きな手を横に振つて毆つて來た。正克は素速く身を引いて、水兵が空を打つた腕をムズと掴んだと思ふと、次ぎの瞬間、水兵は地響きうつて足許へ投げ出された。

亂闘になつた。

水兵達は二三人づつかたまつて飛び付いていつたが、其の都度物の美事に蹴倒されたり投げ出されたりして了つた。

と、一人の水兵は、腰に着けてゐた革のサツクから拳銃を取り出した。

『おのれ、毛唐。』

正克は其の男を目掛けて飛び込みざま、一刀を抜く手も見せず斬り付けた。水兵が發射したの間一髪之差だつた。弾は正克には中らず、水兵は左の肩から大袈裟に斬られ

両手を空に差し上げるやうな恰好をしながら、草の上にドタリと倒れた。

『わあッ。』と聲を擧げ、口々に叫び乍ら水兵達はいつさんに山の下の方へ逃げ出した。

娘は逃げることも出來ず、眞蒼な顔をして、石のやうに立つてゐた。

(四)

騒動は一刻經たぬ間に長崎全體を震撼した。時を移さず、立山役所から長崎奉行能勢大隅守が大勢の配下を従へて現場へ到着したが、其の時は被害者が芝草をから紅に染めて倒れてゐる外には、あたりに誰も居なかつた。

殺されたのは、イケレス號の一等水兵アンデルソンといふ者だつた。英國側は、艦長と、領事ゼエー・ガワール氏とが立會ひ取調べると、同行の水兵は全部で五名であつたが、彼等が申し立てたところに依ると、當日彼等は上陸して丸山方面から風頭山の方へ散歩に行くと、途中で一名の日本の武士が現はれ、突然アンデルソンに斬り付けた儘、

山の奥の方へ逃げてしまつた。犯人はカスリの筒袖を著た若い男だつた。刃傷の原因としては何等の動機もない、と云ふのだつた。

領事ガワール氏は、此の事情を具して長崎奉行能勢大隅守、徳永石見守兩名に會見して、即刻犯人の逮捕を迫り、且つ重大な抗議を發した。

犯人は捕縛されなかつた。然しそれは攘夷派の浪士の仕業であらうといふことになつた。長崎奉行連名で此の事を老中に報告し、英國側は公使パークスに報告したので、爰に容易ならぬ外交問題が惹起した。

風頭山の異人殺しがあつてから、二三日経つてからのこと。銅座町の兵太郎といふ博突打は、中風が發て、數日前から床についてゐた。兵太郎はまだ四十を少し出たばかりだが、若い時から大酒の報いで、つい七八日前のこと、高島の炭坑へ行つて賭場へ坐つてゐる最中發病し、漸う乾兒の者に援けられて船に乗つて歸つて來た儘、いまだに床についてゐるのだつた。

表の格子戸をガラツと開けて入つて來た者がある。それは鳴瀧に住んでゐる音藏といふ奉行所の手先などを勤めてゐる男だつた。

店の間にゐた女房のお種が、

『おや、音藏さん。』

『姐さん、御無沙汰を致しました。此の頃は、親分がお加減が悪いさうで御座いますがいかに御座いますか。』

『はい、大分快い方ですが、はかばかしくなくて困りますよ、音藏さん、まあお上んなさうよ。』

『へい、有難う存じます、それぢや、一寸お邪魔をさせて頂きませうか。』

音藏は上つて煙草入を出した。

『實あとうにお見舞ひには伺はなくちや濟みませんでした。』

『なあにお前さん、誰しも忙がしいから、さうはいきませんよ、まあお茶でもおあかん

なさい。』

『へい、これはどうも……然し姐さん、親分が早く快くならなくてはお困りでございませぬ。』

『ほんとに困りますよ。お醫者様は軽く仰しやるから、安心してゐるやうなもの、お薬もいろく〜と飲んだり、信心もしたりね。』

『御心配でござんせうなあ。時に、今日はお才ちゃんはお留守ですか。』

『お才は二階に居りますよ。』

『さうですか——姐さん、つかんことを伺ふやうですが、此頃お才ちゃんが、風頭山の邊へお出でになつたことはありませんかね。』

『行きましたよ、お父つあんの病氣が治るやうにと、玄妙さんへ御祈禱をして貰ひに行きましたが、それがどうかしたんですか?』

音藏は急に眼を輝やかしたが、さりげない體で、

『別に大した事ぢやござんせんが、一寸お才ちゃんにお尋ね申し度いことがございまして。』

『何んだか知らぬが、それぢやあの子を爰へ呼んで見ませうかね。』

お種は梯子段の下へ行つて、

『お才、お才。』

と娘を呼んだ。

暫らくすると二階からお才が下りて來た。襟の掛つたふだん著に、紅い前垂を掛けてゐるが、縫物でもしてゐたと見えて、襟に、絲のついた針を刺してゐる。

『音藏さんが、何かお前に聞きたい事があるさうだから、爰へお坐り。』

『どうもお才ちゃんは、いつ見てもお綺麗で御座んすなあ。これぢや銅座小町といつて世間で評判を立てるのも無理はござんせんよ。』

『何んですの? 音藏さん。』

「お才ちゃん、あんたは一昨日風頭山へお出でになつたさうですね。」
「え、行きました。」

「其の時、山で武士か何かに逢ひなすつたでせうが？」
「否え。」

「それぢや、イギリスの水兵にぶつかりやなさらなかつたかね？」

「いゝえ、誰にも逢ひはしませんよ。」

「ハテネ。」

と音藏は小首を傾けて、

「お才ちゃん、嘘を云つちや困るよ、山で、お才ちゃんを見たと言ふ人があるんだからね。」

と、急に凄い眼付をした。

お才は黙つてゐた。其の時、奥の部屋から、

「音藏々々。」

と、兵太郎の呼ぶ聲がした。

「あ、親分が呼んでいらつしやる。」

音藏は起つて行つて、襖を開けて、

「親分、御無沙汰を致しました。御加減はいかゞで御座ります。」

「やい、音藏、手前は、俺んところへ、何しに來やがつた……何があらうと、手前なんか、俺の娘を調べられて堪るか。此の馬鹿野郎。」

「お、親分、御立腹なすつちや困ります。お才ちゃんを調べるなんて……。」

「何を云やがる。足腰が利かなくなつて、銅座の兵太郎は、手前達に馬鹿にされやしねえぞ、とつと、歸れ。」

兵太郎は、少し不自由な舌で怒號した。

「へい、どうも相済みません、親分どうぞ御勘辯なすつて下さいまし、姐さん、失禮い

たしました、後で親分にお詫びを申し上げて頂きたう存じます。」
音藏は這々の體で逃げて行つた。

(五)

「をかした男だよ、變なことを聞きに来てさ、お父つあんに憤られたもんだからあわてて逃げて歸つたよ。——だがお才、お前が玄妙さんへお言ひをした日は、丁度異人殺しがあつた日だが、まつたく何も見なかつたのかえ？」

「お母さん、わたし、何にも知りませんよ。」

「さうかえ、それならいゝよ。」

お才は二階へ上つて行つた。

日が暮れてからお才は厠へ行くふりをしてこつそり裏へ出た。裏木戸を開けて外へ出ると、直ぐ前が銅座川である。兩岸は高く石垣を積み上げ、遙か下の方を水が流れてゐる。

朧ろ月が照らしてゐるばかりで、其の河岸つぶちを通る人影もない。

石崖の側面に段々が附いてゐて、川の底の方へ降りて行く場所があつた。お才は其の石段を降りて行つた。其處に、小さな屋根船が、岸に寄せて繋いであつた。それは夏場になると納涼に使はれる船だが、この季節はまだ用がないので、年中川底に繋ぎつばなしになつてゐるのだつた。

お才は身を屈めて船の中へ入つた。そして真ん中邊の板子の上からコツ／＼と指で叩くと、下から板子を持ち上げてムクムクと這ひ出して來たのは、風頭山で水兵を斬つた年の若い武士だつた。

「河野様、さぞ御窮屈で、お苦しいございませう。」

「お才どのか、ヤレ／＼今日も一日経つた。」

河野正克は、船の上へ出ると、手足をうんと伸ばしたり、節々を自分で揉んだりした。

「窮屈は止むを得ぬが、一日の永いのは閉口でござすよ。」

『ほんにさうで御座るませうとも、あなた、妾が少々おみ脚を揉んで差し上げませう。』
『めつさうな、それには及ばん。』

正克はあわて、脚をすつこめた。

『ホホホホ……』

お才は袖で口を押へて笑つた。

『お才どの、度びく／＼出て来て、人に見付けられはせぬか。』

『大丈夫でございます。誰にも見られは致しませぬ。あの、お握飯を持つて参りましたからお上りなされませ。』

お才は自分で作つて来た握り飯を袂から出して、包みを開いた。正克は腹が減つてゐるから、

『これは忝けない。』

と直ぐ様手を出してムシャ／＼食ひ始めた。

お才は側から其の顔を眺めながら、

(この人は、こんな憂目にあつてゐるのに、どうしてこんな平氣な顔付でゐられるだらう)

と思つて、何んといふこともなく感心した。まつたく其の顔は、苦惱も不安もない朗かなものだつた。

さう云へば、お才自身も、何んとなし愉快だつた。晝間終日家にゐる間は、心配でもあり、待ち遠しくもあり、坐つても起つても居られないやうな氣分であるが、同時に、新妻が夕を待ち侘びるやうな一種の樂しさが、腋の下からにじみ出てくるやうな氣持がした。

そして爰へ來ると何も彼も忘れてしまつて、只愉快になるのだつた。現在自分達が大きな危険に直面してゐることすら、やゝもすれば忘れがちである。

『お才どの。』

『はゝ。』

『そなたの深切は忝けないが、いつ迄もこんな處に居つて、萬一露現れれば、そなたにまで迷惑が及ぶから、拙者は何處かへ逃げようと思ふ。』

『駄目でございます、あなたが獨りでお逃げなされても、隠れる處はありませぬ、長崎はまるで袋の中のやうな土地ですから、逃げ出せば直ぐ捕へられてしまいます。』

『でも、此處に居ても、結局おなじことであらう。』

『それはさうでございますが、妾も考へてゐることがございますから、もう一日、明日までお待ち下さいませ。』

『明日でも明後日でも仕方がないが、そなたに心配を掛けて濟まぬのう。』

『まあ、河野様——。』

新地の唐人町の方から、胡弓の音が聞こえて來た。

女貿易商

(一)

出島の和蘭陀屋敷には、鼠色のペンキを塗つた木造の洋館や、切石で造つた倉庫などが建つてゐた。南向きの建物の前には餘り廣くない庭園が取つてあつて、芝を敷いた中に、庭木や花卉が植ゑてあつた。可成り廣い場面を取つてゐる藥園には、様々の藥草が栽培してあつて、其處にも赤や白の花が咲いてゐた。

其處は扇形に海中へ凸出してゐる埋立地で、扇の要の方は、汐入りの河によつて、町の陸地との間を斷絶させてあつた。そして、河に架けられた木橋が、蘭館と陸地との交通を聯絡させてゐたが、橋の上に番所があつて、其處に立てられた高札には、

禁制

一、傾城の外女入る事

と眞つ先に書いてあるのが眼に付いた。

其の傾城の外女人禁制の和蘭陀屋敷の中から、西洋鞍をおいて雪の白毛の肥馬に乗つて、橋を渡つて、出て来る女性があつた。

彼女は、顔を見れば日本人に相違ないが、ひどく珍らしい身なりをしてゐた。美しい縁を取つて天鵞絨の男の服を着て、きつちりと身に附いた白羅紗のズボンを着き、足には光る長靴をはいてゐる。髪は髷を作らずに只無造作に頸の上で巻いてゐるのが、前から見た形ではそれは後世に流行つた耳隠しといふ髪にも似てゐた。

若く見えても、二十七、八にはなるのかも知れない。色の白い、むつちりした肉付きの、どちらかと云へば小柄な女だ。彼女の特徴は、冴えくした理性的な眼と、一文字に緊つた口許であつた。

女は悠々と手綱をさばきながら馬を歩ませて來ると、番所にゐる同心に向つて、馬上から濃艶な笑を浴びせ掛け乍ら、

『旦那、たまにや遊びに入らつしやいませよ。』

と無遠慮に云つた。役人は憤れてると見えて笑つてゐると、

『ほんとに、待つてますよ、左様なら。』

と甲高い調子で云ひ放つたと思ふと、靴の踵でボンと馬の腹に一と當てして、江戸町の通へ乗り出した。

其處には、間口の狭い小さな商家が、河に背を向けて並んでゐた。外國の水夫相手の酒場などがあつた。

この女が馬に乗つて通ると、

『あ、大浦のお慶さんが行く。』

さう云つて店の中から飛び出して見送る者もあつた。町で逢ふ人は殆んど皆彼女の顔

を見知つてゐるやうであつた。そして、驚き呆れて見送るのであつたが、中には顔を擧める者もあつた。若い女達は、お慶さんの異様な姿や、男優りの潤達な態度に壓倒され噂に聞く豪勢な活動や生活振りを想像して、自分自身の意氣地なさを歎いたり、徒らに彼女を羨望したりするのだつた。けれ共お慶さんのはうは、他人の意向など全然念頭にないらしく、さうかといつて傲然とした態度は微塵もなく、至極恬淡たる顔付で馬を走らせて行くのだつた。

お慶さんは女貿易商であつた。

彼女は天草の生れだつた。大家の家附の娘だつたから、故郷で婿を貰つたが、お慶さんは小娘の時分から氣が強かつたのに反して、婿はお定まりのお人好しだつたから、お慶さんはそれが氣に入らなくて、自分の方から無理に婿を追ひ出してつた。そして長崎へ出て來た。それは彼女が二十位の時だつた。

長崎で遊んで暮してゐるうちに、自然に財産も減つて了つた。これではならぬと考へ

思ひ付いたのは外國人と取引きをすることだつた。然し其の時分のお慶さんはまつたく外國の事情は知らず、言葉も出來なかつたから、これではいけぬと考へ、最初はもつぱら異人に接觸する方法を考へた。目的のために手段を選ばぬといふ言葉は、彼女の場合に適切であつた。長崎では、女が外國人と近付くことは、雨だれを飛越すよりも容易であつた。

研究心と冒険心とを兩つながら旺盛に有つてゐたお慶さんは、更に次には外國へ渡航することを計畫したが、其の時代だから、渡航は政府へ願つたところで許される道理はなかつた。すると、通辭の品川藤十郎といふ人の世話で知り合ひになつた蘭人ラキストルが本國へ歸ることになつたので、ラキストルに頼んで、彼のトランクの中へ入れて貰つて首尾よく長崎を脱出することに成功した。それは嘉永六年のことだつた。

お慶さんは、最初ボルネオへ渡り、それからヨーロッパへ行つて方々見物して三年目に日本へ歸つて來た。

お慶さんが日本へ歸つて來た時には、日本の國情は大に變化して、新たに諸外國との間に通商條約が結ばれ、以前は和蘭陀人以外にゐなかつた長崎には、英、米、佛、露などの人々が盛んに移り住むやうになつてゐた。

お慶さんの驚嘆すべき活躍は始まつた。長崎唯一の新知識であり、外國通であるお慶さんは、外交、貿易、社交、何れの方面でも、外國關係に於ては缺く可からざる重要な存在となつた。お慶さんは、日本茶の輸出を着眼し、九州の嬉野の茶をドシ／＼輸出して巨萬の富を得た。日本の製茶を輸出したのはお慶さんが元祖である。

かうしてお慶さんはいまでは大浦の海岸に豪壯な家を建て、住み、榮耀榮華を極め、長崎の一角から世界を睥睨してゐるのであつた。

(11)

お慶さんの馬の蹄の音が憂々と敷石の上に響くと、家の中から數名の男女の召使がバ

ラバラと玄關へ飛び出して、

『お歸んなさんせ。』

『お歸んなさんせ。』

と、口々に云ひ乍ら手をついて主人を迎へた。お慶さんがヒラリと馬から降りると、

馬丁が前へ廻つて馬の口綱を取つた。

お慶さんは式臺に腰を掛けて長靴を脱ぎ、貴族のやうな鷹揚な態度で廊下を歩いて自分の居間へ入つた。

其處は日本座敷だが、疊の上に燃えるやうなベルシヤの絨氈を敷き、イギリス風の椅子やテーブルを据ゑ、支那製の紫檀の書棚の上には、金色燦然たる時計が置いてある。

其の次の部屋がお慶さんの寢室であつた。寢室の方には大きな寢臺や簞笥があつた。寢臺は支那から取り寄せたものらしく、四方とも精巧な彫刻づくめで、花鳥は全部高價な玉で作られてゐた。そして上の方から紅い薄絹の帳が下つてゐる。

『あの、奥様。』

『何？』

『海援隊の近藤様がお見えになつて、先程からお待受けでござります。』

『何處にゐるの。』

『お座敷へお通し申してございます。』

『さう、それぢや、直ぐ行くから。』

すると、女中は思ひ出したやうに、

『それから、もう一人、奥様にお目に掛り度いといふ人が参つて居りますが……。』

『どんな人？』

『十六、七の娘さんでござりますが、どんな御用かと尋ねましたら、是非奥様にお目に掛つてお願い申したいことがあると云ひますから、お勝手の方に待たせて置きました。』

『何處の娘か知らぬが、用があるなら會つて見るから、待たせておくがよいよ。それから、着物を着替へるから出しておくれ。』

『はゝ。』

お慶さんは寢室の方へ行つて女中に手傳はせて、洋服を脱ぎ日本の衣服に着替へた。小紋縮緬の着物に博多の帯を無造作に締め、ギヤマンの鏡の前で一寸顔をうつして見たが、別に化粧を直すでもなく、直ぐに座敷の方へ行つた。

座敷には、三十位の年配の武士が一人、蓑盆を前に置いて退屈さうに坐つてゐた。

それは坂本龍馬の乾兒で海援隊の取締をしてゐる近藤昶といふ男であつた。

『近藤様、お待たせいたしました。出島で大層用事が暇取つたものですから、おそくなりまして相済みませぬ。』

懇意な間と見えて、お慶さんは几帳面な挨拶などはせず、直ぐに客の前へ坐つて云つた。

『いや何、拙者の方は別に急ぐ用でもない、留守に上り込んで反つて失禮であつた。』

『どう致しまして、そんな御遠慮が要るものですか。』

それから主人と客は四方山の世間話をした。近藤は、元來は武士の出身ではなく、通稱は長次郎といつて、高知の餅屋の倅だといふことだが、中々才子で、學問もあるから隊長の龍馬は信用してゐる。

『時に、隊の方は近頃どうでございますか、大層お盛んださうではございませんか。』

『頭數ばかり殖えて、成績は餘り芳しくない、仕事は澤山あるが、いつも金がない。坂本先生は御存じの通り、いくらでも仕事を考へる人だが、只一つ、金を作ることは下手ですからな。』

『ほゝゝゝ、さうでございますか。』

『處で、談の尾に附くやうだが、實は今日あなたに相談に來たのも其の件だ、隊の費用として差迫つて入用の金が調達出來ぬので困つてゐる。拙者は坂本先生の使者に來たのですが、少々隊の方へ融通しては貰へまいか。』

『いか程ばかり御入用でございますか？』

『五百兩あれば宜らしい。』

『それ位のことなら、御用立て致しますとも。』

『それは千萬忝けない、其の返事を承はつて拙者も安心致した。』

『お金は後刻お渡し致しますから、近藤様、今日は御緩りお遊びなさいませ。』

(三)

お慶さんは手を叩いて女中を呼び、葡萄酒と麥酒を運ばせた。

盆の上にグラスを二つ並べて置き、葡萄酒の栓をボンと音立て、抜いた。

『近藤様、これはフランスから着いたばかりの葡萄酒でございます、召し上れ。』

羽は眞紅な血のやうな液を眺めて些か恐氣を振つたやうに、

『拙者はどうもこれは……。』



『お嫌ひでございますか。』

『いや、まだ飲つたことがないので。』

『ホホホホ、長崎へお出でになつてゐて、葡萄酒を召し上らぬやうでは駄目ですよ、それとも、こんな娑あのお酌ではお氣に入らぬのでございますか。』

『飛んだことだ。』

『しかしあなたには、花月の何とかいふ女郎衆——さうく、雛鳥さんとかいふ妓があつて、先方から逆上てゐるさうではござんせんか。貴郎もなか／＼隅におけませんね。』

『これはしたり、跡方もない事。』

『お隠しなされても、すつかり種が擧つて居りますから駄目でございます。さあ近藤様同時に此の盃を乾しませう。』

昶も仕方がないので盃を持つて口へ當てた。お慶さんは愉快さうにグーツと一息に乾して仕舞つた。

お慶さんの眼元はホンノリ櫻色になつた。そして、其の眼の中には、あの輝きが燃え始めた。

お慶さんは、男性的な冒険心や、義侠心を多分に持つてゐるやうに、普通の女よりも遙かに強い情慾の所有者だつた。其の滑かな、弾力性の、健康な肉體からは、いくら波んでも波み盡せない情慾の泉が滾々として湧き出るのだつた。

昶を拉して自分の寢室へ行くことをお慶さんは考へてゐた。其の時襖越しに女中の聲がした。

『奥様、お待たせしてある娘さんは、どう致しませう？』

お慶さんは忘れてゐた其の事を思ひ出した。

『さうく、すつかり忘れてゐた、近藤さん、一寸待つて入らつしやい。歸ると云つたつて、歸しませんよ。』

と、濃艶極まる表情で男を其の場へ押へておいて、女中の後へ隨いて行くと、勝手の

方の小部屋に、一人の娘がシヨンボリ坐つてゐた。それはお才だつた。

『あなた、妾が慶ですが、どんな御用でござんすか。』

『あの……折入つてお願ひ申したい事があつて参りました。』

お才は、かねて聞き及ぶお慶さんの潜勢力と、義侠心に縋つて、河野正克を隠匿つて貰はうとして來たのであつた。

一切の事情を打ち明けて頼むと、お慶さんは、この小娘の案外度胸のいゝのに驚かされたが、持ち前の俠氣を出して、正克を隠匿ふことを承知した。そして本人を此處へ連れて來る手段は斯々と、残らず打ち合せをした。

お才は始めて重荷を卸したやうな氣持になつて大浦のお慶さんの屋敷を出た。

(四)

其の晩、十時を少し廻つた頃、川口の方から、銅座川を遡つて行く一艘の荷たり船

があつた。新地橋の下を通つて、更に二三丁川上へのぼつて行つた處に、例の屋根船が石崖に沿つて繋いであつた。

すると、荷たり船は黙つて向うの船の胴腹へピタリとくツ付いて停つた。

『河野様、早く。』

『お才どの、この御恩は忘れは致さぬ。』

正克は思ひ切つて、ヒラリと向うの船へ飛び移つた。

荷たり船は直ぐに其處から川下の方へ流し始めた。

お才は石段を上つて、河岸に佇んで、流れて行く船を眺めてゐた。

正克を乗せた船はやがて川口へ出て、出島の側を通つてもう少しで港内へ出るころだつた。其の時、川口にもやつてきた一艘の船が急にこつちへ近付いて來たと思ふと、

『其の船、待てツ。』

と呼び掛けられた。船頭は聞えぬ振でぐんぐん力一杯櫓を押し逃げて出した。

「御用だぞツ、待たぬかツ。」

追つて来る船は二艘になり、三艘になつた。船の上には御用の提灯が照し出された。出島の沖合迄は逃げた。けれども、何分こつちは船頭が一人の上に、荷たりだから船脚が遅い。到底逃げられないと思つたか船頭は櫓を捨て、ザンブと海へ飛び込んでしまつた。

正克は菰を被つてしやがんでゐた。

「御用だツ。」

眞先に一人飛び込んで来た男が、菰ぐるみ曲者を押へ付けようとした。其の途端に正克はすつくと立つた。

「やツ。」

捕吏はもんどり打つて海へ投げ込まれた。すると今度は二三人一度に飛込んで来た。港内には無数の船が碇泊してゐたが、この騒ぎのために急にザワめき出し、それく

提灯をつけたり、篝火をたいたりし始めた。船は動かさず、正克は絶體絶命！
衣服を脱ぐ道もなく、正克は船べりへ足を掛けるや否や、身を躍らせて、海の中へ飛び込んだ。

切支丹島

(一)

港は、港口から長崎の町まで、深さ二里あつた。耳飾の翡翠の球を聯想させるやうな港の海を、云ひやうない美しい山々が切れ目もなく包んでゐる。

港口と、外海との中間には、殆んど無数と云ひたいくらゐ澤山の島が散在してゐる。それらの島々は、側面から見る時には、島と島とが重なり合つて一つの島に見えたり、

離れ島が陸續に見えたりするのだが、船に乗って近付いて行くと、思はぬところに潮の早い水路が開けて、島と島とをはつきり區別してゐるのである。

岩山と松とに富んでゐる島々には、入海に沿つて人家が密集したり、粗らに立つてゐたりする。島は、碧い鏡のやうな海に濃い影を投げてゐる。まつたくこれらの島々こそは、長崎の港を美しく見せるための存在であつたし、且つ又それらの島々には何か神秘的な事柄でもありさうなやうな氣持を人々に抱かせることも事實であつた。

港外遙か離れた處に高島がある。俊寛が流された島だと此の地方で云つてゐる伊王島と、香焼島の二島は、就中大きな島で、港外全體を扼してゐる觀がある。其の内側に神ノ島、鼠島、高鉾島、蔭ノ尾島、中ノ島、松島などといふ島が、前に云つたやうな具合に散らばつてゐるのだ。

四郎島は、神ノ島の西南にある周圍半里餘りの小さな島だ。それでも二、三十戸の漁師の家が、入海に臨んで、島らしい營みを續けてゐた。

漁師の八太夫は、其の村では可成りの顔になつてゐた。と云つても、此の島には、貧富と名付ける程、實際において生活上の差別や段階はなかつたから、山の上の墓地にある家々の墓の古さや、其の数の多い少ないに依つて多少格式が付くぐらゐに過ぎなかつた。

八太夫は、門口の處で網を繕つてゐた。其の家はやゝ小高い場所にあるので、附近の島々や、島々を通り越した彼方の大海まで覗かれてゐた。部落の前の小さな入海には五六艘の漁船が入つてゐる。

ギラ／＼するやうな太陽を浴びて鶏が走つてゐる。板圍ひの小屋の中では豚が啼いてゐた。其の親豚は最近四、五匹の仔を生んだばかりだつた。

家の中では女房のかよが、竈の下で火をたいてゐた。煙が勝手口から這ひ出して、風のない空へ流れて溶け込んでゐた。

八太夫は一寸繕ひの手を止めて、女房の方へ向つて、

『どうだ客人は、ちつとは元氣が出たか。』

『もう大丈夫だよ、今みさがお粥を煮て上げるところでござんす、父つさま。』

『さうか、粥を食ふ元氣が出れば占めたもんだい。何處の人だか知らぬが、運のよか人だ。それも神様のお蔭ぢやろ。』

と云つて八太夫は、網針を持つた手を胸に當て、十字を切つた。八太夫はそれつきり何も云はず、熱心に網の破れ穴を探しては繕つてゐる。

茶色に燻ぶつた障子越しに外の光が差し込んでゐる、座敷とはいふものゝ疊代りに座敷を敷いた上へ、手織木綿の蒲團にくるまつて寝てゐる病人があつた。

其處へみさといふ此の家の娘が、土鍋で粥を煮て、剥けた膳の上に茶碗や箸や梅干などと一緒に載せて運んで来て、病人の枕頭へ置き、

『さあお客さん、お粥が煮えたけん、お上んなさいませ。』

木の枕から頭をあげたのは河野正克だつた。

『有難う。』

起き上らうとするのを、

『あれ、お客さん、起きんで、其の儘お上んなさいませ。』

と、みさは留めたが、正克は體を起して蒲團の上へ坐つた。みさは給仕をした。正克はおし戴いて箸を取つて粥を二椀ほど代へて食べた。

『もう少しお上んなさいませ。』

『もう十分です。』

正克が箸を置いて再び體を横にしよとしたところへ八太夫が入つて来た。

『お客さん、元氣が出て、先づ〜お目出度うござりましたなあ。』

正克は慌てゝ坐り直した。

『これは〜、御主人ですか、拙者は河野正克といふ者です、昨夜以來の手厚い御介抱は、お禮の言葉も御座らん。』

「まあ、そんなに改まらずと、俺等はこの通り行儀も作法も知らぬ賤しい漁師でございます、遠慮は御無用、樂に横になつてお話しなされませ。お前様はお言葉と云ひ、御人品と云ひ、お武家でございますな。」

「いかにも、浪人乍ら、兩刀を手扱む身です。」

「昨夜、俺が烏賊を釣つてゐる處へ流れて來さつしやつた時は、衣物も刀もない丸裸でいはゞ土左衛門も同様、澤山水は呑んでゐるし、身内は冷え切つてゐるし、所詮助かりはしまいと思つたが、まあ物は試しと家へ連れて來てたき火で暖めて上げたら、どうやら、息が通つて來さつしやつた。もう少し遅ければ今頃はとつくに冥土へ行つてゐなせる時分だ。一體何處で海へ落ちなすつたか知らぬが、あの潮の早い瀬戸で俺の船へ掛るとは、お前様はよく、運の宜かお人でござりますよ。」

正克は多少水練の自信はあつた。だから昨夜出島沖で捕手の船に追ひ詰められて海へ飛び込んだ時、水中で衣類を脱ぎ棄て、丸裸になつた。そして暗い海を泳いだのであつたが、暗夜のことゝて目標はなく、其のうち激しい潮流に巻き込まれたと見えて何處ともなくグン、グン押し流されるばかりだつた。流れに身を任せてゐても、やがて五體は疲勞し切つて、水の上に支へてゐることすら不可能になつた。間もなく彼は氣が遠くなつて、其の後の事は憶えなくなつたのである。

正克は、命の恩人である此の家の主に向つて虚言を吐くことは心苦しかつたけれども、長崎で外國人を殺した罪に依つて追はれて來た身の上であることを告白するわけにはいかなかつた。

「朋友と争ひをした揚句海へ投げ込まれた。」

といつた風に、八太夫に向つて話した。然し八太夫は少しも疑はなかつた。

「お體がすつかり丈夫になる迄は、遠慮なく家に居て、御養生なさるが宜かたい。」

みさは、母親に云ひ付けられて、豚の餌を持つて小屋の方へ行つた。春の陽ざしが眞上から降り灑いでゐた。後ろの山の根際の僅かばかりの畑には茶種が植ゑてあつて、そ

れが眞つ黄色い花をつけてゐた。羽の白い蝶々がヒラ／＼と其の邊を飛んでゐた。豚は彼女を見ると喜んで『グウグウ』と鼻を鳴らした。みさは餌を投げ込んでやつて戻つて來ながら、ひどく嬉しさうな顔をして空を振り仰いだ。彼女の顔は生の歡びに輝き背中へ垂れてゐる髪は黄金のやうに燃えた。まったく彼女は堪まらなく幸福だつたが何が故に幸福なのだか自分にも解らなかつた。

(11)

日曜日だつた。朝、部落の人々は一人残らず寺へ集まつた。寺は、港の方へ向つた島の北側の、岩ばかりで出來た小山の上に建てられてゐた。其の前面には、天然の岩石の上に階段を刻んだ可成り高い坂があつた。其の階段は、二百年も三百年もの永い間、日曜日ごとに信者が登つたり下りたりしてゐるので角が擦れてまらなくなつてゐた。お堂は木造のさゝやかな建築で、瓦葺きの棟の上には五輪の塔が立つてゐた。此の寺の本尊は

観音だが、よく見ると何處か普通の観音とは違つた處があつて、優美な顔をした女性が毛髪の縮れてゐる小兒を抱いてゐる像だつた。それは俗にマリア観音といふ種類の像だつた。

此の島では、殆ど三世紀間に亘つて此の像を信仰して來たのだ。現在此の島に住んでゐる人々のそんなに遠い祖先の時代から、其の信仰が衰へもせず斷絶もしなかつたことは、實際驚く可き奇蹟であつた。此の祕密の宗教は、魔藥のやうに此の島の土の底まで滲み込んでゐるのだつた。そして島の人々は、たとへば殺し合ふほどの恨みを抱くことはあつても、お互ひの信教についての祕密だけは曝露しない徳義を持つてゐた。

安息日には何も働かない習慣を人々は持つてゐた。そして心ゆくばかりの禮拜を遂げると、今日一日を幸福に過すことを考へ乍ら、それ／＼家路に歸るのだつた。

みさは、何かの木の實らしい紅い玉を聯ねた珠數を頸に掛けてゐた。そして誰よりも後れて、たつた一人になつて寺を出て、山際の道に戻つて來た。

「おい、みさばう。」

と、背後から聲を掛けた者があつた。みさが振り返つて見ると、それは釜四郎といふ四郎島切つての無頼漢だつた。釜四郎はニヤ／＼笑ひ乍ら近付いて、

「みさばう。俺あお前が寺から歸るのを待つてゐたんだぜ。」

と云つた。みさは（厭な奴）と思つた。

「釜四郎さん、何か用ですか。」

「用も有るんぢや、が、まあちよつと一緒に歩かう。」

「わたし、今日は忙がしいんぢやけん。」

「阿呆云へ、安息日に忙がしいことがあるもんか……お前、俺と一緒に歩くのが厭なんぢやろ。」

「……………」

「厭なら厭と云つて見い。お前、この間の俺の手紙讀んだか、讀んだらあの返事を聞か

せて呉れる。」

「わたし、あんな事、知りまつせん。」

「ぢや、厭だと云んだな、俺がこれ程頼んでも、俺と夫婦になることは厭と云ふのか。」

「釜四郎さん、わたし忙がしかけん、お先に行きますよ。」

「やいッ。」

釜四郎は眼に角を立て、みさの肩を掴んだ。

「何するんぢや、この人は。」

「やいッ、この阿魔、貴様は俺に恥を搔かせよつたな。手前が俺を嫌ふわけを知つてゐるぞ、近頃手前の家へ來てゐる若い男は、ありや何者だ。」

「家の親類の人ですよ。」

「虚言云ふな、それぢや、何處の親類だか云うて見ろ。」

みさは返事が出ず口籠つた。

「それ見ろ化けの皮が剥がれた、あの男は、俺の見たところや武士らしか、武士がこんな處へ逃げて来て隠れとるとは怪しかぞ。お前も聞いとるぢやろ、此の間長崎で異人を殺した武士が逃げて了うたさうな、ことによると彼奴が其の武士かも知れん。若しさうなら、そんな武士を隠匿うて置けば、お前の家は家内残らず重い罪を被なければならぬいなぢや、其の時吼え面かくなよ。」

釜四郎はかう云ひ捨てると、尻を巻くつて反對の方向へ走つて行つた。

みさは蒼ざめた顔になつて我家へ歸つて来た。

八太夫と女房のかよは、安息日らしい平和な、倦怠な顔をして家の中に坐つてゐた。

「父つあま、お客さんは？」

「お客さんか、あのお方は裏の山の方へ行きなはつたらしか。」

みさは土間の庭を通り抜けて裏手へ出た。

崖の上に、二株三株椎の木が繁茂してゐて、其の下には冬の落葉が其の儘堆く積ん

でゐた。小笹や雑草に包まれてゐる其處の小徑をみさは登つて行つた。

チ、チ、――

と小鳥が頻りに囀つてゐる。

海風に揉まれて面白い木振りになつてゐる松が二三本立つてゐる處で、芝草の上に尻を据ゑて、正克は眼界に擴がつてゐる雄大極まる景色を眺めてゐた。

正克は、鹿兒島の事を思ひ浮べたり、長崎で別れて来たお才の事を考へたりした。然し、何を考へて見ても、こんな重大な犯罪人として追はれてゐる自分には、一切無駄なことのやうな氣持がした。故郷を出る時抱いて来た大きな理想、それが長崎へ着くと忽ち、あんな事件にぶつかつて、何も彼もメチャクになつて了つた。それがあのお才といふ全く見ず知らずの一人の女から起きた出来事だ。

「人間の運命ちふもんな、全く行き當りバツタリのもんぢや。」

と、正克は獨り言を云つた。然し、こんな境涯になつたにも係はらず、お才を恨んだ

り憎んだりする氣持にはなれなかつた。それどころか、夜になるとあの川船へ忍んでやつて来たお才の移り香が今でも鼻の先に残つてゐるやうな氣持がして戀しかつた。

『莫迦なこと！』

正克は自分自身を叱つた。

『お客さん——』

正克は其の聲で空想を破られた。

『お、みさどの。』

みさは近付くことを遠慮するかのやうに、五六間離れた處からニコ／＼笑つてゐた。

『お客さん、何をしよんなさいますと？』

『餘り天氣が佳か、爰から海を見てゐたのでござすよ、あんたは何處へ行かれた。』

『妾はお寺へ行つて、今歸つて来たところでござんす。』

『ほう、成る程、珠數を掛けとらるゝな。』

正克はこの若い女が頸に掛けてゐる珠數を不思議さうに眺めた。みさは自分の顔を見られたやうに思つて、ぼつと顔を紅くして、あわてゝ珠數を外して袂へ仕舞つた。

『お客さん。』

『何んぢや、みさどの。』

『あなたはいつ迄も此の島においでなさることは、お出来ないませんか。』

『はゝゝゝ、何かと思へば、他愛のないこと、わしは旅の者ぢや。さう永く厄介になつて居るわけにはいかぬ。そなた達の親切で大分體もよくなつたれば、近々お暇を申すつもりぢや。』

『まあ、さう——？』

みさは悲しさうに唇を嚙んだ。遠い海の方に投げられてゐる眼には、涙が一ぱい溜つてゐた。

正克は、何故此の娘が急に萎れたのだから、其の理由を知らなかつた。島に育つた可憐

な切支丹の娘は、ちやうど野に咲いてゐる花のやうにしか彼の眼には映らなかつた。
やがてみさは思ひ切つて云つた。

『お容さん。』

『何んぢや？』

『あなたは長崎で、異人を殺したお人とは、違ひませうね。』

『えッ！』

正克は愕然として、起ち上つた。

『みさどの、誰からそんなことを聞かれた？』

みさは通で釜四郎に逢つて、彼から云はれたことを話した。

『釜四郎は、心の悪か人のけん、用心せんと成りませぬ。』

正克の、暫しの平和の夢は破られた。

(III)

港の西岸、泊戸の千人番所の方から、港口の神崎の方へ行く海岸道を獨りで歩いて行く男があつた。それは鳴瀧の音藏だつた。

右手には、懸崖絶壁の天門峯の奇峰が聳えてゐる。反対側の海の中には、神ノ島や鼠島が横たはつてゐる。其の瀬戸を、白帆の船が無數に通つてゐる。春の海は和やかだ。

然し、音藏の精神は、あたりの景色と適はしからぬ程、焦慮り、荒んでゐた。彼が懐中に忍ばせてゐる十手の職掌から云へば、彼も忠實な人間だつた。彼は、風頭山の異人殺しの犯人を捜索することで夢中になつてゐた。海へ飛び込んで逃げた犯人の死骸が浮いて上らない以上は、必ず附近の海岸へ泳ぎ着いて隠れてゐるに相違ないと見通しを付け、今日も此の邊まで探索にやつて來たのである。

『どうも忌めいめしい畜生だ、が今に見ろ、俺の手であげて仕舞ふから。』

音藏は、心の中で繰り返してゐる。

天氣がよいので、道を歩いてゐると汗が出た。神崎の鼻に茶見世があつた。

『どれ、一ぶくして行かうか。』

音藏は茶見世の縁臺へ腰を卸した。茶見世の婆さんが、澁茶を注ぎ、土瓶も添へて持つて來た。

『お出でなさいまつせ、今日はよかお天氣でござります。』

『佳え天氣だなあ。』

音藏もさう答へて澁茶を飲み、海の景色を眺め乍ら煙草を吸ひ出した。音藏のやうな男でも、景色を眺めれば満更悪い氣持はしないのである。

『婆さんや。』

『へ。』

『何か此の邊に、變つた話はねえかの。』

『へ？ 變つた話と申しますと？』

『は、は、は、お前にそんな事を云つたつて始まらねえことだつた。』

音藏が暫し憩んでゐるところへ、茶見世の前を通り掛つた男があつた。

『其處においでなさるのは、鳴瀧の親分さんぢやありませんか。』

音藏が見ると、やくざ者で札附の四郎島の釜四郎だつた。

『おう、釜四郎か、暫く見なかつたな。』

『お久しうございます。時に親分、今日はどちらへ？』

『一寸此の邊までやつて來たのだ。』

『親分のことだから、何か捕物でもあるんでせうなあ。』

『まあ、そんなとこだ。』

釜四郎は、音藏の側へ腰を掛けた。

『モシ、親分、お前さんが尋ねておいでなさるのは、若しや異人殺しの武士ぢやありま

せんか。』

『それを手前どうして知つた、何か心當りでもあるといふのか。』

『多分さうぢやあないかと思つただけですがね、然し、満更心當りが無いでもござんせん、次第によつちやあ親分のお手傳ひを致しますよ、と。』

『とにかく其の心當りといふやつを話して見ろ、星ときまれば、只働きはさせねえから。』

『實あね、あつしの村の八太夫といふ漁師の家に、此間から妙な男が泊つて居るんですが、其奴の様子がどうも怪しいから、ことに依ると異人殺しの武士ぢやねえかと思ひましてね。』

音藏の面色は俄かに耀いた。

『手前、其奴の面あ見たか。』

『見ましたとも、怪しいと思ふから、何遍も覗いて見たんです。』

音藏は紙入から人相書を取り出して

『年は二十二、三——文は五尺五寸位で肉付もいゝ方だ。色が浅黒くて眉が濃い——』

『親分、それぢや其奴にきまつた。其の通りです。』

釜四郎は皆まで聞かず云つた。

『さうか、そいつあ手前の大手柄だ。さうときまれば今直ぐにも踏ん込んで召捕つて了ひたいが、其の野郎は中々腕の利く奴で、手前と俺と二人位ぢやとても六ヶ敷いから、俺は一旦長崎へ歸つて、旦那方の御出張を願ふことにするから、手前は島へ歸つて待つてゝくれ。』

『承知致しやした、それぢああつしや島へ歸つて、逃がさぬやうに見張つて居りやすからね。』

『釜四郎、頼んだぞ。』

『合點でござんす。』

音藏は茶代を抛り出し、長崎をさして走つて行つた。

(四)

正克は、みさと伴れ立つて山から下りて来た。

八太夫夫婦は、平和な一日を神に向つて感謝しつゝ、家の中に閉ぢ籠めてゐた。

「お客さん、山の上は見晴しがようござりませうがの、みさ、お前も山へ登つたんか。」

「ハイ——」

「娘は、まだ子供でござりますよ、ハハハハ。」

(直ぐに島を立ち退かう)

正克は、山から下りて来る道々既に決心した。それは自分自身の安全を計るだけでなく、此の善良な家族に對する自分の義務でもある。

「さて御主人、永々お世話に相成つたが、手前は今日お暇を申さうと存ずる。」

「ハテ、なぜそんなに急にお發ちなさるのぢや、わしらがところは此の通り、何の御遠慮もいらぬほどに、もつとゆるりと御逗留なされませ。」

「御深切は忝なう御座るが、實は拙者は……。」

と云つて、正克は自分の身の上を打ち明けた。

八太夫もさすがに驚いたやうだつた。

「よう解りました。それでは無理にお引留め申すわけにも参りませぬが、それにしてもお前様は、これから何處へお越しなさる。」

「何處へ参らうか、實は其の當てがないのでござす。」

「他國の人で、土地の様子も知らずに、當てなしに島を出ても直ぐお上の手に掛るばかりでございませう。それでは斯うなされ、此の港の外に、高島といふ島がござります。

つい二、三年前までは只の島であつたが、大浦のグラバといふ異人さんが、其處から石炭といふ物を掘り始め、千人も二千人も土方が入り込んで、近年は大した開け方でござ

ります。其の高島の炭坑といふ處に、私の兄弟分の重兵衛といふ者が、土方の頭をして居りますから、私から其の重兵衛へ頼んでやりますほどに、高島へ行つて隠まうてお貰ひなされ。重兵衛は、男氣のある人間でござりますから、きつと悪いやうにはしません。』

『何から、何まで、御深切、お禮の言葉も御座らぬ。然らば其の重兵衛殿を頼つて参ることに致さう。』

『さう決めても、此の島を出るのに、晝間では人目があつて六ヶ敷い、船出は夜のことぢや。船頭は私の子分の太刀藏といふ男を附けて進ませう。太刀藏なら腕ツ節が強いから、高島迄乗り切れることも譯はありませぬ。』

荒海で魂を鍊へてある八大夫は、どんな場合にも沈着さを失はなかつた。

南國の太陽は黄金を蕩かしたやうになつて、海の中へ消えた。鼠色の島が海を暗くしたのも束の間、やがて海も島も一樣の墨の色に消されて了つた。

正克は、此の家で貰つた漁師が着るやうな布子に三尺帯、旅立ちの支度も何もない。

船の用意が出来たといふから、八大夫夫婦に向つて厚く禮を述べて暇を告げた。

『お客さん。一寸お待ちなされ、お前様に進げる物がある。』

八大夫はさう云つて佛壇の抽斗から一振の脇差を取り出して來た。

『此の脇差は昔から私らの家に傳はつてゐる刀、此處の島の者は今は皆堅氣の漁師ばかりだが、私らが先祖様の時分は、此の邊の者は残らず海賊が渡世であつたげな、唐土や朝鮮迄出掛けて行つて海賊をしたとのことだから、此の刀も其の時分の物かも知れぬが漁師の私らには無用の品、お前様に進めますから、用心に差しておいでなされ。』

『これは忝なうござる、刀は武士の魂、有難く頂戴致す。此の程からの御恩は正克死すとも忘却仕らぬ。』

『何んの其のお禮に及びませう、お前様のやうな立派なお侍が人を斬つたばかりに、こんな漁師のあばら家に三日でも四日でもおいでなさつたといふのも、神様の深い思し召

しでござりませう。さあ、愚圖々々してゐて月でも上ると厄介だから、早く船へお越しなされ。此の村の鼻をぐるつと廻つたところの、龜の岩といふ處に、太刀藏が待つて居りますだ、道案内は娘が致します。」

正克はみさと一緒に外へ出た。

其のあとで八太夫は、胸の上で両手を組み合せるやうにして、此の若者のため天上の神に向つて祈禱を捧げた。

外は暗かつた。みさと正克は沈黙して歩いた。みさは人目に掛らぬために、海岸の道を避けて、部落の背後の山の中段に附いてゐる細徑の方を選んだ。それがために一層歩きにくかつた。やがて杉ヶ崎といふ部落の南方へ突き出してゐる小さな岬の途中から海邊の道へ下り、海傳ひに二丁ばかり行くと、龜ノ岩であつた。其處には名の如く龜の形をした巨大な岩を中心に、一丁ばかりの間奇岩怪石が海中に亂舞してゐる。しけの日なら船など寄り付ける場所ではないが、今日のやうな風ぎでは隠れて船を付けるには屈竟

な地點だ。

間もなく月が上ると見えて四邊が薄明るくなり始めた。彼方の岩蔭に一艘の船がもやつてゐるのが見えた。

「あ、彼處に太刀藏さんの船がゐます。」

と、みさは立ち停つて云つた。正克も船の方を見た。

「みさどの、もう此處迄送つて貰へば大丈夫ぢや。わしは一人で船へ乗るによつて、そなたは早う家へ戻られよ。」

「ハイ……でも……。」

みさは心残りらしく同じ場所に立つてゐる。正克は上から女の顔を見下した。みさの顔が神々しいくらゐ美しく見えた。

「おさらばぢや。」

正克が二歩三歩歩きかけた時、

『もし。』

と、みさが呼び留めた。

『何んぢや。』

『もうこれで、あなたとお目に掛れませぬなあ。』

と、みさは悲しさうに云つた。多分其の眼には泪が宿つてゐたことだらう。正克も何んとなんか感傷的な気分になつた、が、直ぐに氣を取り直して、

『縁があらば又お目に掛らう、さらばぢや。』

正克はさう云ひ捨て、船の方へ走つて行つた。其處は砂地だつた。いつさんに走つてゐた正克が、

『あツ！』

と、叫ぶと同時に前へのめつた。何か横合から飛んで来て、彼の足へ絡まつたものがある。

砂地へ頭を出してゐる岩の蔭から、五、六人の人間が一度に蝗のやうに飛び出して、

正克を押へ付けた。

『御用だツ、神妙にしろ。』

正克は動かなかつた。捕手達は犇々と押へ付けてゐる、其の力に逆らはず體を任せてゐた。それもほんの一瞬。相手が捕つたと安心した途端、正克は下から一人の利き腕を取つて逆にキリ／＼と捻ぢつた。

『きやツ。』

捻ぢられた男は一と溜まりもなく地に轉倒つた。間髪を入れず、正克は滿身に力を入れて振り起つたり、共に起ち上つて抱き付いてゐる二三人の捕方を右左に投げ飛ばした。早業。

バラバラツと、もう四、五名飛び出して來た。捕方は十人餘りになつた。正克は前後左右を取り巻いて了つた。

『それッ、一度に掛れッ。』

と、同心が聲を掛けた。

正克は八方睨みの姿勢を取つてゐたが、

『行くぞッ。』

と叫んで、一方へ飛び込むのと、抜く、斬る、殆ど同時だつた。一名の捕方は逃げる暇も躲す暇もなく、眞向から割り付けられ、聲も立て得ずドサリと倒れた。

『わあッ。』

捕方達は恐怖の聲を擧げた。正克が向直つたのを見ると、捕手共はもう其の場に立つてゐる勇氣すら消え失せ、蜘蛛の子を散らす様に逃げ出した。

正克は其の際に磯の方へ走つて行つて、待つてゐる船へボンと飛び乗つた。

『船頭、頼むぞ。』

『合點だ。』

太刀藏は腕に撚りを掛けて船を漕ぎ出した。

或る犠牲

(一)

賭場は盛つてゐた。三十人位の客が、場をめぐるつて坐つてゐる者もあれば、其の背後に突つ立つてゐる者もある。

銅座の兵太郎は、正面に、座蒲團を敷いてあぐらを掻いてゐる。

壺方は、兵太郎の子分の銀次といふ若者だつた。銀次は壺の中へ骰子を抛り込むと、威勢よくカラ／＼とそれを振つて『やッ』とばかりに座の上に伏せた。

客は、一から六まで張り場に、思ひ／＼に、現金やコマを賭けた。

『さあどうだ、皆な張つたか、無けりや開けるぞ、いやッ。』

銀次は掛聲と同時に壺皿を上げた。場中が一としきりざわついた。勝つた者もあれば負けた者もある。其の一回が片付いて了ふと、又もや銀次は前のやうに骰子を振つた。

銀次は、眼中血走り、額から脂汗を流してゐた。

『銀、待て、今度は俺が振つて見る。』

堪り兼ねて兵太郎はさう云つた。

『へい。』

銀次は申し譯なさうに、骰子と壺皿を兵太郎の方へ渡したが、何だか心配さうに、

『親分、大丈夫ですか。』

『大丈夫だ、右あ確かなもんだい。』

兵太郎はまだ左半身が利かなかつた。本當を云へば家に寝てゐなければならぬ體だが強情我慢な性質ではあるし、少し加減が宜くなるともうジツとしてゐられなくなり、今

朝大波止場迄子分の者の背中で運ばれ、それから船へ乗つてこの高島へやつて來たのである。高島には博突場が何ヶ所もあつた。それは諸方の親分株がそれ／＼出張する賭場で、兵太郎の賭場も其の一つだ。さういふわけだから、餘り永く賭場を休んでゐると折角附いてゐる自分の處の顧客を他の貸元に奪られて了ふ恐れもないではなかつた。

銀次から骰子を取り上げ、兵太郎は自分で骰子を振つた。けれども、どういふものだから不思議な程親に運が悪く、其の都度子方に引かれて了つた。二三番續けると兵太郎の眼も血走つて來た。

『貸元一寸待つてお呉んなさい、俺あこの通りコマが集つてしまつたから、一度コマを上げて貰ひてえのだ。』

坑夫より博賭の方が本職らしい源七といふ旅者は先刻から勝ち續けて山のやうに溜つて了つたコマを金に替へることを要求した。

『源七どん、大層な目の出方だな、コマはこつちにも有るから、構はず張んなせえ。』

「張らぬとは云はぬが、潮時だから、一度コマを上げてお呉んなさい。」
と源七はしつこく云つた。兵太郎は當惑した、といふものは、先刻から子方に引かれ通して、持つて來た金袋の中はとうに空になつてゐるのだつた。今勘定すれば、堂親が破産を宣言しなくてはならない。

「源七どん、コマはきつと形を付けるから、少しの間、見物でもして待つてゐて呉れないか。」

「いや待たねえ、勝つた金を渡さぬやうなら博賭ぢやねえ、そんな貸元が何處にある。さア、たつた今コマの始末を付けて貰はう。」

堂親の懷中が怪しいことが判つて了つたので、他の客も同じ様に持つてゐるだけのコマを金に替へようとした。かうなつてはもう仕方がない。

「客人達、まことに濟まんが、實あ手元が切れて了つたのだ、どうか今日の分は俺のホシにして置いて貰ひ度い。」

と兵太郎は云ひにくさうに云つた。果して客は口々に騒ぎ出した。就中源七は張本人だから承知しない。

「金を拂はなきや騙りだ、そんなことを承知するもんか、ベラボーめ。」

兵太郎は何と云はれても理がないから、蒼ざめた顔をして黙つてゐる。銀次は堪へ兼ねた。

「ヤイ、源七、親分のことを騙りだと云やがつたな。」

「騙りだから騙りと云つたんだ。」

「何を、此の野郎。」

銀次が飛び掛らうとするのを、

「銀、待てツ、靜かにしろ。さて客人衆、俺も銅座の兵太郎だ、星を踏み倒すやうな眞似はしねえ。始末を付けぬうちは長崎へも歸らねえ。萬一始末が付かなかつたら、此の場を去らず腹を切つて申し譯をするから、今日のところは穩やかに引き取つて下さい。」



と兵太郎は云つた。さうまで云はれては争へないから、源七はじめ一同は不承々々歸つて行つた。

(11)

母親のお種は持病の血の道床についてゐた。他に家族といつては、今年九歳の弟の嘉太郎があるだけだ。其の弟は朝から紙鳶あげて夢中で、飛び出して行つたきり歸つて来ない。

お才は一人で家事をしなければならぬから忙しかつた。赤い前垂に襷掛けで甲斐々々しくお勝手で立ち働いてゐたが、其の間に薬を煎じて母親の枕許へ持つて行つた。

「母さん、お薬をお上んなさい。」

「あいよ。」

母親は手拭で鉢巻をした儘腹這ひになつて薬湯を飲んだ。

「ねえ、母さん。」

「何んだい。」

「父さんはあんな體で高島へ行つたけれど、間違ひはないだらうかねえ、妾、心配でありませんよ。」

「わたしもそれあ氣掛りだが、あの人は昔からあゝいふ氣性だから、留めても聞かぬから仕方がないのさ。だが、銀次や三太も行つてることだから別に心配もあるまいがね。」

「それならいゝけれど、妾今朝から何んだか氣に掛るんですよ。」

お才は、齡よりはませたやうな云ひ方をした。兵太郎は渡世柄年中留守がちだつた。だから、留守は慣れてゐるけれども、あの中風に罹つた不自由な體で氣の荒い賭場へ坐つてゐる父親の姿を想像すると、心配といふよりも、痛々しい氣持にならずにはゐられなかつた。

(何事もなければいゝが。)

お才は店の間の長火鉢の側へ来て坐り込んで、ボンヤリ考へてゐるうちに、河野正克の事が頭脳に浮かんで来た。

(あの方はどうなすつたらう?)

あの晩の出来事は、船頭が大浦のお慶さんに報告したから自然お才の方へも判つたが海へ飛び込んだ正克が、生きてゐるか死んで了つたか、それは皆目見當が付かないのである。

(うまく逃げて下さればいゝが。)

あれ以来お才は毎日其の事ばかり考へてゐた。自分の事から間違ひが起きて、立派なお侍一人をあんな運命に追ひ込んでしまつた事を考へると、空恐ろしいやうな氣持であつた。

(どうぞあの方をお助け下さいませ。)

お才は朝夕神に向つてさう念じてゐるのだつた。

考へてゐると、空想は麻のやうに亂れ飛んだ。正克の男らしい顔が眼に浮かんだ。夜人目を忍んで船の中へ尋ねて行つた時、恐ろしかつたことや嬉しかつたことが回想された。然し恐ろしかつたことは今では消えてしまつて、正克とたつた二人で忍び逢つた時の不思議な快樂だけが、いつまでも心の底にこびり付いて残つてゐた。

それは正克と別れてから後一層強く感じる氣持だつた。一言の戀の囁きを交したこともない、指一本相手の體に觸つたわけでもない、けれども、正克の事を思ふと、お才の血は、狂ほしく熱して來るのである。

ガラツと障子を開けて銀次が飛び込んで來たので、お才の空想は破られた。

『おや、銀次さん、どうしたの、父さんは?』

とお才は急いで訊いた。銀次は駆け込んで來た勢にも似ず、しをく草履を脱いで上りながら、

『お才ちゃん、お母さんは?』

「母さんは加減が悪くて奥に寝てゐるのよ。」

「弱つたなあ。」

「どうしたの銀次さん、父さんが高島で、又病氣にでもなつたの？」

「なに、さうぢやありませんがね……。」

銀次はひどく弱つた體である。

「銀次、何か變つた事でも出来たのかい。」

寝てゐるお種の耳へも其の話し聲が入つた。銀次はそれを切つ掛けに奥へ入つて行つた。

「姐さん、どうも困つた事が出来ましたよ。」

銀次は、高島の賭場の一件を話した。

「始末を付けるのに、どうしても爰に百五十兩なくつちやおつ付かねえんです。其の金が出来ないうちは親分も長崎へ歸るわけにやいかず、そればかりか親分も一旦立派にあ

あ云ひなすつた以上は、金の出来ない時は腹を切らなければなりません。とにかくさういふ次第で、金がなくては埒が明かないから、親分を高島へ殘して、儂ひとり姐さんと相談しようと思つて歸つて來たんでございます。」

「まあ、何んといふ事だらうねえ——」

お種も其の話を聞いて茫然としてしまつた。

「堂方が潰れて了ふなんて、あんまりぢやないか。」

「全く昨夜の博突ばかりは、不思議な位でござんした。儂も壺方をしてゐて、こんなブマな事になつちまつては、親分にも姐ごにも言ひ譯がありませんから、いつそ腹でも切らうかと思ひましたが、儂が腹を切つたつて賭場の始末は付きませんから、かうしてオメオメ歸つて参りました。姐さん、銀次の胸の中も察しておくんなさい。」

「それはお前の罪ぢやないよ。さう莫迦々々しく客に目が付くといふのは、つまりうちの人が曲つてる證據なのさ。あんな風に中氣が發て、ろくに歩けもしない體をしてゐる

くせに、高島へ行くと云ふから、妾ア全くやりたくなかつたんだよ、今から思へば虫が知らせたんだらうねえ。

「處で姐さん、金の一件ですが、どこかいゝ目當が、ごさんすか。」

「目當があるものかね、百五十兩なんて大金がさ。」

お種は病氣を忘れて起き上つてゐたが、金のはなしになると途方に暮れて溜め息を吐くばかりだつた。

お才も側へ来て坐つてゐた。

(III)

唐模様を加へてある豪壯な建物の、耀やく棟瓦から、晩春の夕陽が光を消すと間もなく丸山の遊廓には、眼が醒めるやうなすがくしい燈火が輝やき始めるのである。

「長崎に丸山といふ所なくば、上方の金銀無事に歸宅すべし。爰通ひの商ひ、海上の氣づかひの外、いつ時しらぬ戀風おそろし。」

と、元祿の昔、西鶴が云つた丸山は、幕末時代も衰微へぬばかりか、近年諸外國と條約を結んで以來長崎の殷盛につれて、昔に勝る繁昌を示してゐる。

三尺四方の花崗石を敷き詰めてある往來は、打水が程よく乾いて、其上をチャラ／＼と引き摺る雪駄の音が、騒がしく入り亂れるのも、廓の宵らしい情緒である。黒く塗つた高塀の内の庭の八重櫻が、ヒラ／＼と花片を散らして、素見客の足許に落ちて来る。廓はまさにこれから忙がしくならうといふ刻限。

丸山、寄合町切つての大樓『花月』は、長い暖簾に奥を隠して、表から見るとひとつそり閑と静まり返つてゐる。此の家は張り店をしないから、素見客も寄り付かず、玄關前の石燈籠の燈火が煌々と燃えて、重々しい格式を誇つてゐる。

頼山陽が、此の家で遊んでゐながら筆を揮つた『養花山館』と書いた扁額が懸つてゐる。玄關の邊りも至つて静かである。土間も、天井も、柱も、階段も、古めかしく寂び

て、只拭き込んだ廊下ばかり艶々しく光つてゐる。廊下の外は廣い芝生の庭につゞいて唐風の築山や、泉水が見えてゐる。

玄關から程近い内所では、主人の太左衛門が、何か帳面を出して調べてゐる。其の側で、四十路を敷へてもまだ襟足の水々しい丸髪に結つた内儀のお重が、美しい布を廣げて縫物に餘念がない。

「貴郎。」

内儀は何か思ひ出したやうに、針の手を休めて話し掛けた。

「うむ。」

と云ひ乍ら太左衛門は帳面を繰つてゐる。

「近頃家の花里のここへ来る若いお侍を御存じですか。」

「薩摩屋敷の藤岡さんといふ人だらう、あの美男の。」

「さうでござんす。美男でお金の廻りもよいから、花里も大事にするのでござんせうが

若い人がさう金の續く道理はなし、あまり繁く通つて来て、若し間違ひでもなければ宜しうござんすがねえ。」

「ハハハハ、お前のやうに、さう取越し苦勞をしてやつても仕方がない。全體廓といふ所は、世間の若者を迷はせて、身代をはたかせるやうな仕掛けになつてゐるのではないか、さういふお客がなくては遊女屋は立ち行かぬわ、ハツハツハ。」

「厭ですねえ。」

其の時、内所の小間使が入つて来て、

「旦那様。」

「何んだ。」

「只今、銅座の兵太郎さんといふ人の娘さんだといふ人が參つて、旦那様にお目に掛り度いと申して居りますが。」

「何、兵太郎の娘？」

「貴郎、兵太郎さんの娘なら、あのお才といふ娘でございますよ。」

「兵太郎の娘が何用があつてやつて来たのかな。」

「何の用か知らぬが、とにかく會つておやんなさいまし。お前直ぐ其の人を爰へ御案内してお出で。」

「はう。」

お才は直ぐに案内されて来た。

「旦那様、おかしやま、御免下さりませ。」

「お才ちゃん、よくお出でだね、さあ〜遠慮なくこつちへお進み。時に、此頃聞けば兵太郎さんが中氣が發たとかいふはなしたが、うちぢやお見舞もしなかつたが、お父つあんの御病氣はどうですね。」

「はい、まださつぱりいたしませんので。」

「寝ておいでかえ？」

「いゝえ、漸々起きることは起きましたが、左の手と足が利きませぬので。」

「それはお困りだらうねえ。養生して、一日も早く元の體にならねば困るねえ。」

主人は訝かしさうにお才を見て、

「お前さん、何ぞ急な用事でもあつて來なすつたのか？」

「はい……。」

「どんな御用事かの。」

お才は口ごもつてゐる。

「爰には私と家内だけだから、何にも遠慮はいらぬ、云つて御覽。」

「旦那様、妾にお金を百五十兩お貸し下さいませ。」

「藪から棒に、そんな大金を貸せと云はれても返事に困るが、一體お前にどうしてそんな金が要るんぢや？」

「實は旦那様。」

お才は事情を語つた。百五十兩の金が出来ねば父が腹を切らなければならぬから、其の金をつくるためにお才は自分の身を犠牲にする覚悟をしたのだ。父を見殺しにするわけにはいかず、さりとて他の方法で金をつくる見込みはなかつた。思案に餘つたあげく芝居によくある身賣りの場面をお才は思ひ浮かべて、花月へ頼みに來たのである。

『いや、お前さんの話はよく解りました。天下御法度の博奕のいきさつでも、それが渡世の兵太郎どんであつて見れば、次第によつては腹も切らねば成りますまい。それをお前が、自分の身を賣つて親の急場を救はうといふ心懸けは感心だが、然し處女が身を賣るといふことは容易ならぬ事だよ、お前それを知つてお出でかい？』

『は、はい……。』

『承知の上なら、金を貸さんとも云はないが、齡のいかぬお前さんから相談を受けてもオイソレと引受けることは出来ん。といつて切羽詰つた今の場合、親父に腹を切らせるわけにもいくまい。ハテ困つた事だのう。』

太左衛門は腕拱いて考へてゐたが、

『それぢやお才ちゃんかうしよう、お前の孝心に愛でて、ともかくも金は用立てよう。

お前の體を引き當てにして、向う二十日の日限を切つて、兵太郎さんに貸してやることにしよう。二十日以内に金を持つて來ればよし、それが出来なかつた場合には、氣の毒だがお前さんに勤めをして貰はねば成らん、よいか。』

『はい……旦那様、有難う存じます。』

『では、明日迄に證文を作つて、兵太郎さんの判をついて貰ひ、其の時金は渡すことにしよう。』

『有難うございます、何分宜ろしうお願い申します。』

お才はやつと救はれたやうな氣持になつた。

『時にお才ちゃん、お前は幾歳だつたかな？』

『十七でございます。』

『ほう十七かい、それにしちやあ大層駈かりしてゐる。』

お才は極り悪るさうにうつ向いた。

(素晴らしい玉だ、此の娘を抱へりや、千兩箱を二つも三つも貰つたやうなもんだが)と、太左衛門夫婦は、一方では商賣氣も出ないわけにはいかなかつた。

『旦那様、おかみさん、それではお暇いたします。』

『さうかえ、ぢや氣を付けてお歸り。』

お才は、御内所を出て、廣い廊下を歩いて來た。

其の時、藝子舞子に取り巻かれて、大玄關から上つて來た一人の客があつた。みやびやかな服装をした若い武士だ。

『入らつしやいまつせえ——』

仲居の聲が店中に響いた。取巻がさんざめき乍ら、お客をまん中へ圍ふやうにして廊下を歩いて來るのにお才はバツタリぶつかつたから、廊下の端の方へ體を小さくして避

けてゐた。が、そのお侍の顔を見ると、何處かで見ることがあるやうな氣持がした。

其の武士は藤岡民彌だつた。民彌もお才に氣が付いて、

『おやツ。』

といふやうに立ち停つた。彼は直ぐにそれが風頭山で出逢つた娘であることを知つた。

あの時正克が引き起した騒動を目撃してゐたのは民彌一人である。

民彌は、意外な場所でお才と再會したので、驚いたやうだつた。

『ふうさま、何を愚圖々々して居んなさつと。太夫さんがお待ち兼ねですばい、さあさあお出でなさいませ。』

藝子達は民彌を押し出すやうにして向うへやつて、陽氣に階段を上つて行つた。

(四)

大波止から出る高島通ひの船には、大勢の乗客が乗り込んでゐた。労働者もあれば

長崎から品物を持って行く商人もあり、印袴天を着た職人もある。

正午頃、客がすつかり乗つてしまふと、船は帆をキリ／＼と巻き上げた。船は片帆で走り出した。直ぐ左手が出島である。海上から見ると和蘭陀館を、見慣れてゐる人でも矢張り、珍らしさうに眺めるのである。鼠色に塗られた木造洋館のベランダの上に、眞紅の長襦袢を着た日本の女が、丈の高い異人と立ち並んで、恥かしげもなく船の方を見て笑つてゐた。

風頭山、彦山、烽火山、稻佐山——薬研の底のやうな長崎の町を取り巻いてゐる山々は、薄い春霞の中に長閑に立つてゐる。港には、三、四艘の蒸氣船が入つてゐた。其の中の一艘は今にも出帆するの、煙突から盛んに煙を吐き、甲板の上を白い服を着た水夫が忙しげに走つてゐる。さうかと思ふと、十艘ばかりの唐船が、昔ながらの古風な彩色を施した船腹を見せ、三角の旗を微風になびかせながら、思ひ／＼の場所に碇を卸してゐる。

「長崎もめつきり盛んになりましたなあ。」

と、我が事のやうに自慢らしく云つたのは、呉服でも商ふらしい商人である。

「左様々々、何しろ諸外國と交易が始まつて、商ひ高が百層倍にもなつたといふんだから、長崎は繁昌する筈でさあ。」

「どうも世の中は變りますて、だから御同様餘つほど大きな眼をあいてゐないと、儲け損ねますからな、ハハハハ。」

「變つたと云へば、高島も變りましたなあ、あんな小さな島へ何千人といふ人間が入り込んだのですから、大したわけさね。」

「何しろ、海の底を掘れば、石炭といふ物が出るんだから、豪儀なものですよ。」

乗合の人々のそんな雑談に空耳を走らせながら、小さくなつて坐つてゐるのはお才だつた。

船の胴まん中に、一人の西洋人と、三四人の武士が、廣々と席を取つて乗つてゐた。

西洋人は、黒羅紗の服の下に、卵色のチョッキを着てゐる、年齢はまだ三十そこく
だらう。白皙の皮膚だが、氣持のいゝ櫻色をしてゐる。紅毛は渦巻いて頸の邊まで掛り
それが陽に觸れると絹糸のやうに光つた。

『後藤さん、長崎も開けましたネ。』

西洋人は、案外立派な日本語で、同伴の武士に向つて云つた。

『さうですなあ。』

『安政六年——西暦千八百五十九年でした、私が初めて長崎へ来た時は、長崎は淋しい
港でした、文明はまだ日本を訪れてゐませんでした、それからまだ六年しか経ちません
長崎も變りましたが、日本も變りましたネ。』

と云つたのは、南大浦の山上に豪壯眼を駭かす邸宅を構へてゐる貿易商人、英人グラ
バであつた。

相手の武士も風采堂々たる巨漢である。それは濱ノ町にある土佐商會の實權者後藤

象二郎である。象二郎は、今日グラバの案内で高島の炭坑を見物に行くところだつた。

『けれども、まだくらくらでも變りますよ。今後の世界には、すべて孤立といふこと
が無くなるでせう。大西洋の水は、長崎の港に續いてゐる。これは西洋では、三百七十
年前コロンブスに依つて教へられた思想です、これは人類にとつて大きな發見でした。

然し、世界に共通のものは、海の水ばかりではない。金も、銀も、共通に流れてゐる。

否な、そればかりではない。人間の精神、思想、みな共通であらねばならぬのです。後

藤さん、あなたどう思ひますか。』

グラバは、情熱家らしく面を耀やかかせて云つた。

高 島

(11)

船は、幾つもの帆に一杯風を孕ませて走つた。港の兩側の山々は、次第々に後方へ送られて行く。

海上の風が、お才の鬢の毛を翫つてゐる。桃色の美しい頬を太陽がカツキリ染めてゐる。朗らかな自然の現象は、お才の胸に蟠まつてゐる憂苦を、暫しなりとも拭ひ取つて呉れるのだつた。お才は船客達の雑談に吊り込まれて思はず微笑ませられたり、何の苦勞もないやうに、島や山の景色を恍惚とした眼付で眺めたりすることもあつた。

と、お才は、胴の間の方に、侍客と一緒に乗つてゐる西洋人が、やき付くやうな眼で熱心に自分の方を眺めてゐるのに氣が付いた。彼女の眼が相手の視線とカツチリぶつかつた時、西洋人は莞爾笑つた。それは誰でも美しいものに出會つた場合に思はず吊り込まれる好意的な微笑だつたが、お才はギョツとして、急に険しい表情をして横を向いて了つた。けれ共心の中では、

「あの異人は何ういふ人だらう？」

と、考へて見たりした。お才のやうに、長崎で生れて長崎で育つた者には異人はちつとも珍らしくはない。けれども、幾ら見慣れてゐても、異人は矢張り異人だ。異人種に對する、先天的憎惡の感情は、別段當時流行の攘夷思想に刺戟せられなくとも各人の胸の中に貯へられてゐる。お才は今、其の嫌ひな毛唐人に自分の顔を見られて何んとなく腹立たしいやうな氣持がしたのであつたが、しかし其の異人が立派な風采であることや立派な侍達と伴れ立つてゐることなどから、一種の好奇心も起らずには居られなかつた。

餘程経つてからお才が再びそつちの方を見た時には、西洋人はもう彼女の方を見てゐないで、同伴の武士達と頻りに話をしてゐた。

船はいつの間にか外海へ出た。すると前方に高島が見え出した。其の島の姿が眼に入ると同時に、お才は、島で病んでゐる父の兵太郎の事を考へて、今迄晴れくしてゐた胸のうちが、急に重たい石で壓へ付けられたやうに塞がつて來て、云ひやうのない憂鬱

に引き込まれるのだつた。

彼女は自分の役目を考へた。父を救ふ自分の役目を――。

『そして、わたしの身は――。』

自分自身にさう云つて見て、お才は思はず身顛ひをした。彼女は胴巻に入れて體へ巻いてゐる花月から借りて來た百五十兩の金のことを考へた。可成りの重味のあるそれだけの黄金が、即ち彼女の體の代償であつた。處女の貞操と、一切の運命とを、それで賣つて了ふのだ。お才は後悔するやうな氣持にもなつた。今からでも長崎へ後戻りして、金を返してしまひたいやうな氣持もした。

『けれども、それでは父さんが……。』

島で侘しく病んでゐる落ち目になつた父の事を考へると、何も彼も諦めて、成り行きに委せるより外はなかつた。

申刻前に船は高島へ着いた。其處には港らしい船着場はなかつたが、海の中に小さな

棧橋が突き出してゐた。そして、其の邊には石炭船が幾艘もゐた。海岸には見上げるやうな石炭の山が幾つも出來てゐて、澤山の人足が其の石炭を崩しては船へ運んでゐた。さうかと思ふと、何處か遠くの方から、掘り出したばかりの石炭を此處迄運搬して來る人足の群もあつた。

船客は我れ先きにと陸へ上つた。陸にも可成り澤山人が居た。侍や西洋人の一行も上陸した。お才は人々よりおくれ船を出ると、乾兒の三太が來てゐるのを發見した。

三太は少しばかり足りない男だつた。

『三ちゃん、迎ひに來て呉れたの。』

と、お才は笑顔になつて近付き乍ら云つた。

『銀次阿兄が居なかつたから、おいらがお迎ひに來たんだよ。』

『さう。お父つあんの場合はどう？』

『きのふから加減が悪いといつて寝てゐるよ。』

『困るねえ。』お才は美しい顔を曇らせて云つた。そして三太と並んで歩き乍ら、『あんまり無理をするからだわ。』

二人は海岸の道を村の方へと歩いて行つた。島の中央には高い山が聳えてゐた。そして、其の山裾に人家があつた。炭坑は何處にあるのか一寸見ただけでは分らなかつた。けれども其の道を、澤山の人足が列を作つて、石炭を運搬して來るのにお才達は行き遇つた。石炭を籠一杯に盛つてそれを二人で擔ひ乍ら運んでゐるのだつた。

黄八丈の裕を着て、艶々しい島田に結つてゐる、輝くやうなお才の姿は、全く此の島に不調和を極めて見えた。人足達は石炭を運び乍らお才に行き遇ふと、愕きと同時に譯も分らぬ喜びに満ちたやうな氣持になつて、卑しい眼を無遠慮に投げ付けたり、口々に卑猥な悪口を云つたりした。中には三太を知つてゐる者もあるらしかつた。

『おい、阿兄、うまくやつてるな。』

三太は擲擲はれても得々然として歩いてゐる。

『厭だねえ。』

お才は其の都度眼を伏せては、耳の附根まで紅くした。

七、八丁行くと、村端れの小高い處に宗林寺といふ寺があつた。漁師の家と家との間を通り抜けて、石段を上つて行くやうになつてゐた。

『お才ちゃん、爰だよ。』

と云つて、三太は先へ石段を走つて上つた。

兵太郎は寺の庫裡の座敷を借りてゐた。

『お父つあん。』

『お、お才。』

お才は父の側へ走つて行つた。兵太郎は蒲團を敷いて寝てゐたが、起き上らうとしても自由が利かなかつた。

『お父つあん、無理をせんと、寝ておいでなさいよ。』

『うむ……。』

と云つて、兵太郎は再び枕へ頭を着けた。僅か三日か四日の間に兵太郎はひどく弱つてゐた。

『お才、えらう心配掛けて濟まなんだな。阿母が怒つてるだらうな。』

『いゝえ、母さんは怒つてなんかおませんよ。』

『さうか。』

兵太郎はさう云つて黙つて了つた。それでもこれでも、お才はかうして父親の顔を見るとやつと安心した。病んでゐる父親だけでも、其の側にゐることが妙に安心な氣持を起させた。

『船はどうだつた？ 船酔ひはせなんだか。』

『ホホホホ、酔ふもんですか、今日はほんとに静かな海だつたもの。』

と、お才は非常に愉快な旅でもして來たやうに噪いだ聲を出して云つた。それから親

子は家の事だの、長崎の近所の家の噂などを語り合つた。肝腎な問題については、どつちからも觸れることを恐れるかのやうに話し出さなかつた。

『お才ちゃん、お出でなさい。』

銀次も外から歸つて來た。銀次は昨日長崎から歸つて來て、一切の報告を兵太郎にしてある筈であつた。

『お父つあん、お金を持つて來ましたよ。』

お才は餘程經つてからさう云つて、隅の方へ行つて向う向きに坐り乍ら長いことかゝつて胴巻を引き出した。それから丁寧に着物を掻き合せたりしてから紅くのぼせた顔をして金の入つた胴巻をば父の枕元へ持つて來て置いた。

『お父つあん、此の中に百五十兩ありますよ。』

けれども兵太郎は仰向けになつた儘眼を閉ぢて黙つてゐた。恐らく彼は娘の顔を見ることすら出來なかつたに相違ない。

『お才、か、堪忍してくれ、俺が悪かつたんだ。』

兵太郎は漸うこれだけ云つた。其の兩眼からは泉のやうに泪が溢れ出て、幾條にもなつて顔の上を走つた。

お才も到頭泣き出した。

(11)

『銅座の親分、約束の金は出来ましたかね、今日で五日目だ、何とか眼鼻を付けてお呉んなせえな。』

蝮といふ渾名のある旅者の源七は、案内も頼まずツカ／＼上つて来ると、クルツと膝を出して坐つて、寝てゐる兵太郎の方へ向つて憎々しい調子で云つた。棕櫚のやうに赤い毛髪の縮れた、鰐口の、渾名の通り人相の悪い男だ。

『催促をしなくても、ホシは拂つてやる、手前のホシは幾許だつたな。』

兵太郎は寝た儘で答へた。

『三十兩だ。』

『さうか、ぢやあ三十兩拂つてやる。』さう云つて兵太郎は障子の向う側へ向つて、

『お才、お才。』

と呼んだ。

『はい。』

と云つてお才が現はれた。それを見て源七は吃驚したやうに眼をみはつた。

『お才、金を三十兩出して来い。』

『はい。』

お才は引つ込んだが直ぐそれだけの金を取り出して来た。

『銀次、數を改めて、此の男に拂つてやれ。』

『承知しました。』

銀次はお才の手から小判を受け取ると、員数を改めて、ぼんと壘の上に置いた。

『おい源七どん、三十兩ある、受け取るがいよ。』

源七は意外さうな顔付をしてゐたが、眼の前に並べられた小判を見ると流石に嬉しさを包み切れずニコ／＼顔になつて、丁寧に數を改め、財布の中へ仕舞ひ込んで、

『へい、確かに三十兩、頂きました。親分、どうも有難う御座いました。』

源七は急に態度を變へてペコ／＼頭を下げた。

『源七どん、それで文句はなからう。』

と、銀次が云つた。

『銀次阿兄、文句なんかありますものか、有難うございました。』

『手前のはうに文句がなかつたら、こつちに云ひ分があるんだ。ヤイ源七、手前は何んでうちの親分のことを島中へ悪口云やがつたんだ。』

『俺あそんなこと云つた覚えはねえ。』

『何を白ツばくれやがる、手前が吐した悪口は皆こつちへ知れてるんだ。』

『だつて俺あ知らねえ。』

『嘘をつけ、此の野郎。』

と、銀次は飛び掛つて、源七の襟許に手を掛けた。

『銀次さん、お止しなさいよ。』

と、お才がそれを止めた。

『だつて、此の野郎があんまり。』

『いよ、何を云つたつて後で分るぢやないの。お金を拂つてあげたら、それでいよぢやないの。』

『へい、まあさう云やさうですがね。ヤイ源七、勘辨成らねえ處だが、お才ちゃんがああ仰しやるから、今日のところは勘辨してやる。トットと歸りやがれ。』

源七は這々の體で寺を飛び出した。然し懐中には三十兩の金が入つてゐる。夢を見て

ゐるやうな氣持で急ぎ足に漁師村の中を歩いてゐると、
『おい、源七どんぢやねえか。』

と、うしろから呼び掛けられた。源七が振り返つて見ると、年の頃四十前後の眼のギョロツとした男。長脇差を一本差してゐる。

『あ、これあ茂木の貸元、どちらへお出掛けでございますか。』

源七は追従笑ひをしながらベコ／＼叩頭をした。それは茂木港の九兵衛といふ博奕打だつた。

『一寸用足しに行つた歸り途さ。が、源七どん、お前は莫迦に景氣が好いと見えるな。』

『へへへ、どう致しまして、からつきし仕様がございませぬよ親分。』

『あんまりさうでもなさうな顔付をしてゐるぢやねえか。時に、お前と爰で會つたのは幸ひ、ちいつと話しがあるんだが、其の邊まで付き合つて貰へねえか。』

『へい、何處でもお供を致しますとも。』

『ぢやあ、其の邊で、一杯やり乍ら話しをしよう。』

少し歩いて來ると、障子に『酒さかな、一ぜんめし五島屋』と書いてある坑夫相手の飲食店があつた。時刻外れだから店には客は入つてゐない。

『御免よ。』

『入らつしやいませ。』

『姐さん、奥は空いてるかい。』

『へい、空いて居りますから、お通り下さいませ。』

座敷といふ程ではないが、奥へ通ると一室二室坐るやうな小部屋がある。かうした家には白首の女がきまつて二、三人づつ居る。

『姐さん、肴は見つくりひで、早く酒を持つて來て呉れ。それから私らは今日は相談があるんだから、運ぶ物を運んだら、お前達は遠慮して貰ひ度いんだ。』

『はい／＼、畏まりました。』

酒が来た處で、九兵衛は徳利を持つて、

「さあ、一つ酌をしよう。」

「まあ、親分から。」

「い、から盃を持ちねえつてことよ。」

九兵衛は無理に相手に盃を持たせ、酌をしてやつて、それから二人で飲み始めた。

「時に源七どん、噂に聞いたが、お前は此の間、銅座の兵太郎の賭場を潰して了つたといふことだが、見掛けによらぬ凄腕だのう。」

「へへへ、どう致しまして、あれあほんの怪我勝ちでございませう。」

「なにさうでねえ。然し、俺に云はせると、大體貸元ともある者が、百や二百子方に引かれたといつて、資本を切らすといふのは餘り見つともねえ話だの。それぢやあ賭場を潰されても仕方がねえさ。本當を云やあ其の場去らずに腹を切るところだ。」

「だから、あつしも頑張つたんでさあ。」

「それあ當り前だ。で、其の時のホシはまだ形が付くめえの。」

「處が、きれいに拂ひましたよ親分。」

「何、拂つた、何時？」

「今日形を付きましたのさ。實あ儂も、所詮拂やあしめえと思つてましたが、今日いまのさつき催促に行きますとね、耳を揃へて三十兩すつぽり投げ出されて、驚いて歸つて来たところですよ。」

「ふうむ……兵太郎がどうしてそんな金を工面しやがつたんだらうな？」

「儂も不思議でならねえのだが、今日行つて見ると、長崎からお才とかいふ娘が来て居りやしたが、何んでも其の娘が金を持つて来たらしい様子ですぜ。」

「何、お才が来てゐるのか……と云つた處で、あんな小娘が大金を持つて來るといふのも不思議なわけだな。それあさうと源七どん、俺はザツクバラに話しをするが、あの兵太郎の奴にやかねく遺恨があつて、いつか機を見て彼奴を叩き潰してやらうと思

つてゐたのだ。それに兵太郎が居なくなりやあ、長崎は俺の縄張りになるから、何かと都合も宜くなるといふもんだ。それに就いちやあ今度は又とない好い機会だから、思ひ切つて兵太郎を片付けて仕舞ひたいと思ふのだが、何んと俺に腕を貸しちやあ呉れめえか。首尾よくいつたら、禮は十分にするつもりだ。」

と、相談を持ち掛けると、源七は一も二もなく引受けた。

「承知致しやした。他ならぬ親分のお頼みだから、何んな事だつて片棒擔ぎますよ。」

「有難え、ちやあ其の手筈は後で相談をすゝとして、取敢へず是あホンの手附だ。」

と云つて、九兵衛は小判を二枚、眼の前で紙に包んで出した。

「親分、そんな御心配を掛けて、濟みませんねえ。」

「遠慮することあねえ、取つときねえ。處で、ついでにもう一つ頼みがあるんだ。」

「どんな事でございますか。」

「他でもないが、俺の兄弟分で十手を預かつてゐる鳴瀧の音藏が來ての話しに、此の間

長崎で異人を殺した武士が此の高島へ逃げ込んだ形跡があると云ふんだ。然し他の場所と異つて、炭坑のシキの中へでも潜り込んだが最後、此處ばかりはお上の御威光も及ばねえ處だから、音藏でも手が附けられねえと云ふのだ。だからお前一つ坑内の様子を探つて、もしそれらしい奴が居たら俺に知らして貰ひ度いのだ。この一件も、うまく手柄を立てりや相當な御褒美が出る筈だから、一つ骨を折つて貰ひ度いのだ。」

「承知致しました、今の話は、どつちも源七がせい／＼手足になつて働きますから、御安心なせえまし。」

それから兩人はコソ／＼密談をしてゐたが、日の暮れ方に五島屋を出ると、右と左に別れて立ち去つた。

(111)

海岸の濕つた砂地の上に澤山の入足が休憩んでゐた。石炭擔ぎの籠と棒を抛り出して

思ひ／＼にかたまり合つて、煙草をふかす者もあれば、馬鹿話に夢中になつてゐる組もある。顔も手も石炭で眞つ黒になつてゐる。

其處は人家のない處で、背後の山の方には雑木林が茂つてゐた。前方は一望際涯ない大海原である。

たつた一人其の群から離れて、波打際近くの石の上に尻を据ゑて、遙か沖を通ふ白帆を眺めてゐるのか、それとも波濤の上を飛び廻つてゐる鷗を見てゐるのか、身動きもしないで海を眺めてゐる男があつた。眞黒い顔をしてゐるから相貌こそ變つて見えるが、それは河野正克だつた。

正克は、首尾よく四郎島を逃げ出して、太刀藏の船に乗つて、此の高島へ着くことが出来た。そして、人足頭の重兵衛を尋ねて、會つて事情を話し、四郎島の八太夫から指圖されて来たことをも話して一身の保護を頼むと、重兵衛は快く承知して呉れた。

「さういふ譯なら、あなたのお身の上は私がお引受け致しますせうが、只遊んでゐては人

目に附いて反つて宜くありませんから、お氣の毒だが土方と一緒にゐて働いてゐて下さいまし、其の内にはこの重兵衛が何んとか工夫をして何處かへ逃がして差し上げますから。」

と、重兵衛は深切に云つて呉れた。其の後も重兵衛は蔭になり日なたになつて世話をして呉れる。

「命惜しきに炭坑の土方とまで成り下つたのか。」

正克は自分自身にさう云つて見た、

「否、命が惜しいからではない、俺には望みがある、日本の國難に盡してからでなうてはこの命は捨てられぬのだ。」

と、重ねて自分に答へた。

沖の方を、一艘の蒸氣船が通つてゐる。船からは煙を吐いてゐる。其の蒸氣船は次第次第に長崎の方へ近付いて來るらしく見えた。

正克が鹿兒島に居た時分、青年の仲間、大多數は攘夷論に傾いてゐた。それは熱烈な思想であつたわりに、理論的には可成り薄弱であつたけれども、彼等はそんな自己の缺陷に對しては考へて見ようともしない呑氣な連中だつた。正克は今でも其の思想を改めようとはしなかつた。彼は今外國船らしい蒸氣船を見ると、何となくそれが我が日本に仇なす惡魔か何かのやうに思はれた。

『西洋の文明々と云ふけれども、西洋の文明はやがて我國を亡ぼす害毒なのだ。』
誰か云つたそんな言葉を思ひ出された。

『モシ、何を獨りで考へてゐなさんだ？』

側へ來てかう云つた者があつたから、正克が顔を上げて見ると、同じ土方部屋で寢起きをしてゐる播州といふ男だつた。

播州は、小肥りに肥つた小ぢんまりした體で、丸顔の、何時でもニコ／＼笑つてゐる愛嬌のある男だつた。

『何も考へちやゐない。』

『さうですか。』

播州は相手の返辭などには頓着しないやうに、正克の横へ來て砂の上に尻を下して云つた。

『此の間からお前さんに訊いて見ようと思つてゐたが、お前さんは言葉の様子ぢや鹿兒島らしいが、鹿兒島は御家中でせうね。』

正克は何となくギョツとした。

『馬鹿を云へ、俺はそんな者ぢやない、只の百姓だ。』

『アツハハハ、お前さんの面摺れや、竹刀だこを見なくたつて、武士だか百姓だか見別けの付かぬやうなあつしぢやございませんよ。だがそんなことはどうだつて宜うがす。』

私あ本名は傳吉と申します、どうか宜しくお頼み申します。』

『わしこそ宜しく頼む。』

「炭坑などといふ處は、地獄のやうな處で、お前さんなどの來る場所ぢやないが、これには何れ仔細が御座いませう。お前さんもどうせ此處に永くは居なされるまいし、私も何處かへ行くつもりだから、世間へ出て出會つた時には、どうかお心安くお頼ひ申しますよ。」

と傳吉は云つた。正克は此の男の素性が何者だとも解し兼ねるので、返辭をせず黙つてゐた。すると傳吉はすつと立ち上つて向うの仲間の居る方へ行つた。

「妙な奴だ。」

正克は其の後姿を見乍ら獨りでつぶやいた。

其の時、海岸を村の方から、長い着物を着て怠け者らしく懐ろ手をしてやつて來たのは、源七だつた。

「やあ源七阿兄、お前は今日も休みか。」

と土方の一人が聲を掛けると、源七は側へやつて來て、

「うん、俺あ當分坑は休みだ。」

と、傲然として答へた。

「源七阿兄、お前大層博奕で勝つたさうだが、俺達にも一杯飲ませて呉れねえかよ。」

源七は一寸考へてゐた。

「飲ませるとも、酒ぐらゐ幾らでも奢つてやるが、外にお前達に一寸相談したい事があるから、顔を貸して呉れないか。」

「いゝとも、どんな相談だが知らねえが、丁度今煙草休みだから、皆な源七阿兄の話を聞かうぢやないか。」

と一人が云ふと、其處にゐた四五名の土方達は肯き合つて、一同源七の後へついて、山の裾の方へ行つて輪になつてしやがみ込んだ。

「源七阿兄、相談といふのは、どんな事なんだ？」

「他でもねえが、皆な知つての通り、長崎から銅座の兵太郎が出張つて來て賭場を出し

てるが、あの兵太郎といふ奴は太い野郎で、島の金を巻き上げるばかりで、うぬが負けた金は一文も拂はねえのだ。博奕打の風上にも置けねえ奴だと、茂木の九兵衛親分が大層腹を立て、な、兵太郎一家を叩き潰して了はうと云ふんだが、就いてはお前達に手を出して貰つて、一と思ひに兵太郎を殺してしまひてえと思ふのだ。此の仕事がうまく行きやあ、九兵衛親分からタンマリ禮は出させるが、どうだい、皆な一骨折つて見る氣はねえかい。』

と云つて源七は、九兵衛に貰つた二兩の内一兩それへ出した。

『これあホンノ手附だ、皆なで一杯やつて呉れ。』

小判の顔を見たので一同は譯もなく元氣付いてしまった。

『どうだい。外ならぬ源七阿兄の頼みだ、皆な思ひ切つて引き受けようぢやないか。』

『さうだ、阿兄、確かに引受けたよ。』

口々に承知した。

『有難え、それで俺も安心した。』

一同は其の場で相談を始めた。

其の時、林の中の小徑を歩いて来る若い女の派手な姿があつた。源七は眼敏くそれを見付けて、

『おい、皆な見ろ。向うからやつて来るのは、兵太郎の娘のお才といふ阿魔だ。あの女を引つ擔いで山の中へ運んで了はうぢやねえか。そしてさんく慰んだ揚句に、船へ乗せて天草へでも持つて行つて叩き賣れあ、大した金儲けだぞ。』

と、源七が云つた。一同は直ぐそれに賛成した。

『ぢやあ、抜かるなよ。』

『合點だ。』

お才は島にたつた一軒の醫者の處へ薬を取りに行つた戻り道だつた。海岸の方は石炭運びの土方が澤山通るので、わざと山手の林の中の道を選んで歸つて來た。縦の木が茂

つてゐる林の中では小鳥が頻りに囀つてゐた。

すると突如、茂みの中から大勢の土方が飛び出して来て、何を云ふ暇もなく、手取り足取り引つ擔いで山の奥深く運んで行つた。

(四)

山頂の大きな岩石の上に立つて、時々望遠鏡で島の光景を見下したり、遙かに海の上を眺めたりしてゐるのは、グラバと後藤象二郎だつた。此の山には中腹にそつて樹木が多くて、頂上近くからは露出して岩石ばかりだつた。

島は僅かに周圍一里餘だつた。前面には洋々たる大海が擴がり、右手の方には五島列島が、山のひだまで分るやうに近々と横たはつてゐた。

海岸を石炭を運ぶ人足の姿が、ほんたうの蟻のやうに小さく見えた。

グラバは、紅い頬鬚を風に吹かせ乍ら、黄金の飾りを施したステツキで其の蟻の行列を指した。

『後藤さん、あれを御覧下さい。今此の炭坑に約二千の人が働いてゐるのです。坑道は既に海の底迄擴がつてゐるのですよ。毎日百噸宛の石炭が海の下から掘り出されてゐるのです。西洋の近代の文明は機械の文明です、其の機械を動かすものは石炭なのです。

そこで後藤さん考へて御覧なさい、何が日本に取つて大きな事柄であると云つても、機械を動かす石炭を地の下から掘り出すといふ事程、驚く可き出来事がありませうか。日本は外國と條約を結びました、然し、單なる條約、それは一片の言葉に過ぎません、けれども、石炭は、日本の文明を生み出す實際の原動力です、未來の日本は此處から生まれて來るのです。』

トーマス・ブレイキ・グラバ——それが彼の正しい名前であつた。彼はスコットランドのブリツジ・オブ・ドーンといふ金鑛地帯に生れたのだつた。彼がマルコポーロの東洋旅行記を讀んだのは十二、三歳の頃だつた。

『日本。』

何といふ永い憧憬の對象だつたらうか。彼が上海へ来たのは二十の年だつた。其處で二年暮した。すると安政五年の開港條約で、六年正月から條約國民の日本へ行くことが許されたので、グラバは、上海から直ぐに長崎へ来たのだつた。従來からの和蘭陀人を除いて、日本へ来て貿易を始めたのは彼が一番早かつた。

後藤は長崎へ来てまだ間がなかつた。彼は長崎へ来ると直ぐ坂本龍馬からグラバに紹介されたのだつた。

グラバは、石炭論から續いて、日本の未來を語つて止まなかつた。彼は日本の封建制度を極力非難した。

『世界の強國で、現在も封建制度を立てゝゐる國はありません。一國の皇室や政府以外の者が、土地と人民を私有する權利はないのです。支那でさへ郡縣制ではないですか。日本もやがてさうなるでせう、一日も早く封建制度を廢さなくては駄目です。』

其の時、二人が立つてゐる下の方の森の中から女の叫び聲が聞えた。

『後藤さん、何んでせう？』

とグラバが云つた時、

『アレエー！』

と再び悲しい叫び聲が響いた。象二郎はいきなり岩の上から飛び下りて森の方へ走つて行つた。グラバも直ぐに其の後へ續いた。

象二郎が駆けつけて見ると、五、六名の悪漢が一人の女を森の中へ擔いで来て、まさに暴行に及ぼうとする處だつた。

『こらッ。』

大喝一聲象二郎は其の場へ飛び込んで行つて、女の上にし掛つてゐる奴の襟髪へ手を掛けるが否や、狗ころを投げるやうに二、三間彼方へ投げ出した。他の土方達は、象二郎の腕力と堂々たる威風を見たばかりで吃驚して、

『こいつは堪らん。』

と、蜘蛛の子を散らすやうに逃げ出した。

『女中、怪我はないか。』

と象二郎はお才の方を見て云つた。けれどもお才はまだ失神したやうになつてゐたから返事も出なかつた。

象二郎に投げ付けられたのは源七だつた。彼は激しく木の根に腰を打ち付けたので、暫しの間は起き上がることも出来なかつたが、やがて辛うじて立つと腰をさすり／＼逃げ出さうとした時、一足おくれ其の場へ来たグラバの太いステッキで散々に打ちのめされたので、到頭平太張つて了つた。

『後藤さん、此の悪人を調べて下さい。』

『宜ろしい。こらツ、貴様、娘を手籠めにしようとは怪しからん奴ぢや。』

『へ、へい、旦那様、これあホンの冗談で御座います、どうぞ御勘辨を。』

『馬鹿ツ、冗談にこんな事をする奴があるかつ、名前を云へ。』

『どうぞ御勘辨を。』

源七は平蜘蛛のやうになつて謝まつてゐる。其の時分になつてお才は漸う人心地がついたので身を起して、亂れた衣物をつくろつたりした。そして始めて自分を救つて呉れた人をよく見ると、昨日船で一緒に乗つて来た武士と西洋人だつたので、お才はびつくりした。

グラバの方でも驚いたやうであつた。

『貴女、昨日船に乗つてゐた方ですネ。』

グラバはお才に近付いて云つた。

『はい、左様で御座います。』

『後藤さん、あなた此の娘さんを御存じでせう。』

『顔は見知つて居ます。女中、これはどうしたいきさつぢや？』

「妾がお医者様へ行つて、お薬を戴いて歸つて参りますと、此の下の林の中でだしぬけにあの人達が出て来て、妾を捕へたので御座います。」

「悪人、何といふ野蠻人だ！」

グラバは眞つ赤な顔をして嗷鳴つた。それから彼は呼子の笛を取り出して音高く吹き鳴らした。

暫らくすると、其の音を聞き付けたか、二、三人其の場へ走つて来る者があつた。一番先に來たのが人足頭の重兵衛だつた。

重兵衛は此の場の様子を見乍ら、象二郎やグラバに向つて小腰をかゞめて訊ねた。

「旦那方、これあどうなさいました？」

「お前は何者だ？」

と象二郎が云つた。

「へい、私は人足頭の重兵衛と申します者で。」

「左様か、實はこれ／＼だ。」

象二郎は逐一譯を話した。すると重兵衛も立腹して、

「ヤイ源七、貴様あ何といふ野郎だ。」

「親方、出来心だからどうか勘辨してお呉んなさい。」

「何を云やあがる。」

重兵衛は拳固で源七の横つ面を三つ四つ殴り付けた。

「重兵衛さん、此の男の外には、悪人の仲間が五、六人居りました。私は彼等を全部この炭坑から放逐することをあなたに嚴命します。」

グラバは嚴乎たる態度を見せて云つた。

「承知致しました。大體此の野郎は怠け者で博奕ばかり打つてる好くない奴で御座いますから、今日の事は此奴が張本人に相違ございません。仲間の奴も調べ出して、直ぐ様追つ拂ふことに致します。」

『それから、重兵衛さん、此の娘さんを、家へ送つて上げて下さい。』
『宜ろしう御座います。姉さん、お前は何處の人だね？』
『はい、妾は銅座の兵太郎の娘でございますが、父つあんが此の島へ来て病氣になつたので看病に参つて居ります。』

『あゝ、兵太郎さんの娘さんかい、それならお前の父つあんとわしとは懇意な仲だ。お寺迄確かな者を附けて送らせるから安心しなせえ。そしてよく旦那方にお禮を申し上げるがいゝぜ。』

『はい、旦那様、危ふい處をお助け下さいまして、有難う存じます。』

お才は改めて二人に向つて禮を云つた。今の騒ぎで髪などはすつかり毀れてゐた、一時は血のけのなかつた顔に、安心したのでほんのり紅みがさして來た。

まつ黒な瞳の大きな眼は、星のやうに輝やいてゐた。

『何んといふ美しい娘だらう——』

グラバは、寧ろ驚きの眼をもつてお才の顔を眺めてゐた。彼は今までに澤山の日本娘を見たことはあるが、こんなに美しいと思ひ、惹き付けられたことは未だ嘗て経験しない事だつた。

彼は急に胸が波うつやうに感じた。そしてこんな美しい娘の居る長崎といふ土地の生活に對して、今迄よりも遙かに強い憧憬や歡びを感じて來た。

お才は、グラバがどんなことを自分に對して考へてゐるかは知らなかつたけれども、昨日船の中で顔を見られた時とは異つた、一種の親しみさへ此の西洋人に對して感じるのだつた。

(五)

坑道の内部には澤山の自然柱が立つてゐる。それは掘り残された石炭層や、或ひは岩石の柱だつた。それらの柱が、自然の天井を支へてゐるのだつた。坑道は廣くなつたり

狭くなつたりしてゐる。廣がつてゐる處には柱の數も多かつた。それは埋没してゐる古代の宮殿のやうでもあつた。

處々に、魚油の安全燈が吊してあつた。黄色い鈍い光線が、其の附近だけボンヤリ浮き上らせた。石炭を掘る音響が何處からともなく傳はつて來て、坑全體の空氣を震動させた。

一人の坑夫が、カンテラを提げて坑の口の方からやつて來た。と、隅に寄つた方の一方の柱の蔭から、

『おい、丹州。』

と聲を掛けた。呼ばれた男は立ち止つた。

『此處だ。』

側へ行くと、柱の蔭に二、三人の仲間がしがんでゐた。續いて一人二人づつ其處へやつて來た。六、七人頭が揃ふと、

『ぢやあ皆な、一つ相談を始めよう。』

と口を切つたのは蝮の源七だ。

『今日は思ひ掛けないドヂを踏んでしまつたが、何かいゝ智恵は出ねえものかなあ。』

『これと云ふのも、元を糺しやあ銅座の兵太郎から始まつた事だから、今夜兵太郎の處へなぐり込んでやらうぢやねえか。』

『それもいゝが、どうもそれだけぢあ面白くねえ。どうせ俺達あくびになつたんだから腹癒せに思ふ存分暴れてやらうぢやねえか。』

『それがいゝ、それがいゝ。』

『此の間から日當の事で、飯場の中が揉めてゐるから、丁度いゝ幸ひだ。仲間の奴等を煽てゝ一騒動おつ始めてやらう。さうすれば、あの重兵衛は勿論だが、毛唐人の奴にも遺趣返しが出来ようといふもんだ。』

『面白え〜。』

一同窓を集めて密謀の眞最中、

「カチヤン。」

といふ激しい音がしい、其の眞ん中へ何か飛んで来た。

「あッ！」

一同飛び上つた。

「何んだ〜。」

飛んで来た物を拾ひ上げて見ると火を消したカンテラだつた。

「何處から投げやがつたんだらう。」

「誰か居るに違ひない、それッ、皆なで探して見ろ。」

一同手わけをして邊りを探して見たが一向に人氣もない。逃げて行つたやうな足音も

聞えない。

「ハテナ」

源七は小首を傾けた。

それから間もなく一同は外の方へ引上げて行つた。

眞暗がりの岩石の天井へ蝙蝠のやうに吸ひ付いてゐる人間があつた。人々が立ち去つ

て了ふと、音も立てずヒラリと舞ひ下りた。

「ハハハハ。」

と暗闇の中で笑つたのは播州の傳吉である。

日が暮れると、飯場の中は坑夫や人足でゴツタ返してゐた。カンテラの光りがドス黒い人間の蠢きを照らしてゐた。

正克が隅の方で小さくなつてゐると、其の側へ傳吉がやつて来た。

「モシ、お前さん彼處に居る男を御存じですかい。」

傳吉が指さした方を見ると、人足のやうな風體はしてゐるが何處か様子の異つた男が

人々の中ひとびとに交まじつてゐながら鋭すまじい眼付めつきで部屋へやの中なかを物色ぶつしよくしてゐる。

『わしは知らん男をとこだ。』

『さうですか。彼奴あいつは鳴瀧なるたきの音藏おとぞうといふ目明めあかしですよ、爰こゝへ化け込こんで來きてゐやがるんだが、どうも目當めあてはお前まへさんらしいよ。氣きを付つけなくちやあいけませんぜ。』

『有難ありがたう。』

『今日けふお拂はらひ箱ばになつた源七げんしちといふ野郎やろうが、仲間なかまを煽せごて、騒動さわどうを起おこす企たくらみをしてゐるから、今夜こんやあたり何かおつ始はじまるかも知しれねえのさ。』

『其その男をとこは何なにんで解雇かいこになつたので？』

『何なに、大體だいたい良くない奴やつなんだが、今日けふまつ晝間びるまのこと、銅座どうざの兵太郎へうたろうといふ者ものの娘むすめを山なかへ擔かつぎ込こんだ處ところを、運うん悪わるくグラバといふ炭坑たんこうの持主もちぬしの異人いじんに目付めつけられて其その場ばでくくびになつたんでさあ。』

『えッ、銅座どうざの兵太郎へうたろうの娘むすめ？』

『お前まへさん、知しつてなさるのか。』

『いさゝか……。』

と云いつたが、正克まさかつは急きふに胸むねが騒さわぎ出だした。けれ共どもお才さいが此この高島たかしまへ來きてゐようとは思おもひも寄よらぬことだけに奇異かしぎな氣持きもちもした。

『お才さいはどうして此この島しまへ來きたのだらう……？』

正克まさかつは其その疑問ぎもんを解とかうとした。

(六)

夜更よふけてから可成かなり強つよい風かぜが出でて來きた。雨戸あまどがコト／＼鳴なつて、波なみの音おとが高たかくなつた。お才さいは枕まくらをつけたが眠ねられなかつた。波なみの音おとが一つ／＼數かずへられた。

ド、ド、ド、ドツ——

寄よせては返かへす波なみの音おとが、物凄ものすごく、悲かなしく聞きえた。波なみの音おとを聞きいてゐると、この身みを底そこ

知れぬ海の中へ引き込まれでもするやうな氣持になつた。晝の恐ろしかった出來事を思ひ出したり、將來の事をそれからそれと空想して見たりした。

『もう幾日か経てば廓へ行かなければならない——』

其の前に、百五十兩といふ大金の工面が付く道理はないのである。金が出来ない以上は、約束通り身を賣るより外に仕方はない。

限りもなく不幸な自分の運命をお才は空想した。すると、この世で一番不幸な人間になつて了つたやうな氣持になつて、涙が留め度もなく流れて來た。

其の時彼女はフト、先達て風頭山の玄妙さんに云はれた言葉を思ひ出した。

『お前さんは、これからいろ／＼な事があるよ。』

あの時は何氣なく聞き流してゐた玄妙さんの云つた短かい言葉が、神様のお告げか、或ひは悪魔の囁きのやうに、深い意味がありさうに感じられて來た。

『いろいろな事つて、どんな事があるのかしら——？』

彼女は、解けない謎を無理に解かうとして、考へ考へしてゐる間に、頭が痺れたやうになつて、知らず／＼眠りの中に引き込まれた。

何か恐ろしい夢だつた。夢の正體は分らないけれども、呼吸が止る程恐ろしい夢を見て、お才はふと眼を醒ました。胸の動悸が止まず、體中ビツシヨリ汗を掻いてゐた。

何刻だか知らぬが風は益々強く吹いてゐた。父親の方を見ると、よく眠つてゐるらしく『スウ／＼』と寢息が聞えた。有明の灯影に照らされた其の寢顔が、氣味の悪い程甕れてゐた。

ピイ／＼、ピイ／＼——

波の音と、風の騒ぎの中を、飛び交ふ磯千鳥の聲が、笛でも吹くやうに枕に響いて來る。

お才はすつかり眼が冴えてしまつた。

丁度其の時刻に、寺の前の石段を登つて来る七、八名の怪しい人間がめつた。各々腰に一刀を帯び、草鞋ばきで、褌を掛けたりしてゐた。

「源七どん、お前は勝手が明るいから先に立つて呉れ。」

と云つたのは茂木の九兵衛だつた。

「おつと心得た。」

源七は先立ちで進んで、本堂と庫裡の間の、兵太郎が借りてゐる座敷の前迄来ると、半分朽ち果てゝゐる縁の上へそつと這ひ上つて、雨戸の節穴から暫らく中を覗いてゐたが、やがて人々の側へ戻つて来て、

「親分、首尾は上々吉です。」

「居るか。」

「白河夜船で寝てゐますよ。」

「そいつあ旨え、ぢやあ一と思ひに雨戸を蹴破つて入つて了へ。」

「合點だ。」

二、三人同時に縁へ飛び上ると、激しく雨戸を足で蹴つた。ガタビシしてゐる雨戸は苦もなく外れた。

「それツ。」

と、中へ飛び込まうとした瞬間に、何處から飛んで来たのか、ピューツー ピューツと風を切つて飛んで来た礫が、其の二、三人の後頭部や頸筋の邊を目掛けて美事に命中した。

「あツ。」

「わツ。」

礫打ちを食つた奴は、中へ踏み込む前に、縁から下へ轉がり落ちた。外にゐた者は、それを家の中からやられたのだと思つた。

「さては起きてるぞ、油斷するな。」

と、警戒する途端に、反對に背後の方の、寺の庭の隅にある南天の大株の蔭からばつと飛び出して来た人影があつた。

あなや、といふ間に近付いて、バラリズンと、手近い一人を斬り倒した。血刀を揮つて突つ立つたのは、河野正克だつた。

『それツ、邪魔者が出た。此奴から先にやつて了へ。』

九兵衛は流石に逃げ出さずに、一刀を抜いて立ち向つたので、他の者も同じやうに抜きつれて正克を包围した。

座敷では、素早く蒲團をはね除けて飛び起きたお才が、兵太郎の枕許にあつた脇差を取つて引付け、自分の體でもつて父親を庇ふやうにしてゐた。

『お才、怪我をするな、は、早く逃げろ。』

兵太郎はさう云つて娘を逃がさうとして焦慮したが、お才は動かなかつた。其處へ、隣室に寝てゐた銀次と三太が寝ぼけ眼で飛び込んで来た。

『銀次さん、三ちゃん、殴り込みだよ、睨りやつておくれ。』

『お才ちゃん、親分は。』

『お父つあんは妾が引き受けるからいゝよ。』

お才は何處から出たかわからぬ程の勇氣が身内に漲るのを感じ乍ら、落ちついた聲で云つた。それは先刻涙で泣き濡れてゐたお才とは全く別人のやうであつた。

銀次と三太が、刀を持つて戸外へ飛び出して行かうとすると、正克がチラと見て、

『これツ、一人も出るに及ばんぞツ。』と、風の中で呷鳴つた。

お才は其の聲に、不思議な程強い記憶を呼び起されたが、じつと同じ場所に坐つた儘動かなかつた。聲はそれつきり絶えて、風の中から白刃の觸れ合ふ音だけがした。

九兵衛は刀を巻き落されてゐた。そして額の邊から血を流してゐた。源七も何處か少しやられたと見えて血だらけになつてゐた。二人、三人、庭に倒れてゐる者もあつた。

九兵衛は到底敵はないと思つたので、

「皆な、逃げる。」と聲を掛け自分が眞つ先に逃げ出した。手負ひを捨て、一同バタ／＼逃げ出した。

正克は敢へてそれを追つて行く様子もなく、暫く寺の庭のまん中に突つ立つてゐたがやがて彼も血刀を提げた儘石段の方へ歩いて行つた。すると、忽ち前方に火の手が上つた。

(七)

人足小屋の附近から火事が出たのは、此處の騒ぎと殆ど同時刻だつた。

火は烈風に煽られて忽ち小屋に燃え移り、つゞいて附近の民家に延焼した、民家は丁度枯れ草でも焼くやうに焰のために舐められた。

山の中腹に建てられてある炭坑事務所では、グラバと後藤象二郎が、火事の勢を眺めてゐた。火事が大きくなりさうに見えたので、グラバは、

「後藤さん、私、消防の指揮をして來ます。」

と云つて、一度部屋の中へ入つたが、ピストルを腰に附けて出て來て、一人で山を降りて行かうとした。

「危険だから、止されたはうがよからう。」
と、象二郎は止めた。

「然し、此の島で火事を出せば、私の責任ですからね。」

「ぢやあ、我れ／＼も一緒に行かう。」

象二郎は伴れて來てゐる兩三名の土州の侍達にも同行を命じた。其の時、山の下から戻つて來た事務員が、

「火事は放火です。炭坑内の無頼の徒の仕業だと申します。それから、彼等は此の騒ぎに乗じて暴動を起す危険がありますから、どなたも外出なさらぬやうにして下さい。」
と云つた。さう聞くとグラバは猶更行かなければ承知しなかつた。

島は名状すべからざる混亂に陥つてゐた。火は、島を根こそぎ焼き盡さねば止みさうもなく見えた。西の風に煽られた火はやがて船着場の方へと燃えていつて、其處に積み上げてある石炭の山に燃え移つた。絶好の燃料を得た火事は俄然火勢百倍して、炎々天を焦し、火の子は八方に散亂し、海上から見ると島全體が一つの火焰の固まりのやうに見えた。

お才は、父親を三太に負はせ、銀次と四人で山の上へと逃げた。山は絶頂まで避難した人々で埋まつてゐた。

グラバは、自から坑夫を指揮して消防に努力したが、勇敢な其の行動も實際においては効果はなかつた。

播州の傳吉は、火と人の間を、通り魔のやうに走つてゐた。

もう一人勇敢に走り廻つてゐるのは目明しの音藏だつた。彼は、火の子が小髻へ燃え付くのさへ知らずに夢中になつて、彼自身の獲物を探し廻つてゐた。

正克は、寺を出た時火の手を發見したが、瞬くうちに大火となつて、附近の民家は總て焼けになり、やがて其の火は寺の屋根まで飛火して燃え上つたので、火の子の中を潜り乍ら再び寺の庭まで引つ返したが、其の時はお才親子はすでに何處かへ避難した後だつた。

彼は何處といふこともなくうろつき廻つてゐるうち、バツタリ傳吉とぶつかつた。

『お、こんな處に居なすつたんですか、私あ方々お前さんを探してゐましたよ。』

傳吉はさう云つてから、

『さあ、もうこんな島に永居は無用だ。私と一緒に逃げませう。』

と、正克を促がし立て、云つた。正克は、此の男が善か悪かは知らないが、島を逃げ出すことについては同感であつた。

『どうして逃げるのだ？』

『船がありますよ、私がちやんと用意してあるから、さあ早く船へ行きませう。』

黙つて傳吉の後へついて行くと、風上に當る島の西北隅の、入りこんだ大きな岩陰に一艘の小舟がつないであつた。『さあお乗んなせえ。』

と傳吉は云つた。云はれるまゝに正克はヒラリと飛び乗ると、續いて傳吉も乗つて、櫓綱を掛けて巧みに船を漕ぎ出した。

船は沖へへと出て行つた。島の火は海上を眞晝のやうに明るくしてゐた。正克が燃え盛つてゐる火事を眺め乍らお才の安否を氣遣つてゐると、

『あの娘のことは心配は要りませぬ。火の來ない山の上へ逃げてますからね。』と、傳吉は船を漕ぎ乍ら云つた。

仇 花

(一)

長崎の春はとりわけ早く逃げていつてしまふ。山の色が急に緑を増して晴れた空は、海の魚の肌のやうにうるんでくる。其の空には毎日紙鳶が揚つてゐた。就中日を定めた紙鳶揚げ日には、風頭山や城の古址の賑はひは大したものである。

世間は日増に明るく陽氣になつて行くけれど、お才の家にはそれと反對に陰氣な冷たい影がさしてゐた。父親の兵太郎は依然として病人だつた。お才が廓へ行く日は一日一日と迫つてゐた。百五十兩などといふ大金が此の期に及んで工面の付く道理はないからお才はもう廓へ行くことは観念してゐたことであるが、自分が居なくなる後の我家の事を考へると一層心は滅入るばかりだつた。

今日も今日とてお才は、店の間で針仕事をしながら、將來のことをそれからそれと考へたりしてゐると、表の格子戸があいて、

『御免なさい。』と入つて來たのは丸山で屈指の料理店と云はれる玉川の内儀であつた。

『あら、入らつしやいまし。』

お才は直ぐに縫ひ物を下に置いて立つて行つた。内儀は、粹な丸髷、澁いお召の衣物に黒縮緬の羽織といふ拵へ、四十に手が届く年配だが年齢よりもずつと若く見える。

「お才ちゃんお仕事ですか、よく御精が出ますねえ。」

「おかみさん、どうぞお上りなすつて。」

「はい、御免なさい。」と云つて内儀は上つた。

臺所の方にゐた母親のお種も其の聲を聞いて出て来た。茶の間へ通して綺麗な座蒲團など出し、それからお才はお茶をいれて出したりしながら、つひぞ来たこともない玉川の内儀がいつたい何の用事で来たのかしら？ と不思議に思つた。

「一向お見舞にも上りませんが、お父つあんの病氣はどうですね。」

「有難う御座います、どうも捗々しくなくて困ります。」

「それあ不可ませんねえ。然し、まだ大したお齡ではないから氣ながに養生したら屹度快くなりますよ。」

内儀は澁い貰入れと煙管を出したが、一ぶく吸つてボンと煙管をはたいた。

「時に、今日だしぬけにお尋ねしたのは他の事ぢやありませんがね、此の頃一寸噂に聞けば、お才ちゃんが花月へ身を賣ることになつたといふのは、眞實の事ですか。」

「はい、實はお恥かしい事情がありました。」

と、お種が答へた。

「なんの、親のために身を賣る人は世間に澤山あるから、恥かしいことはないが、然し妾とお才ちゃんを小さい時から知つてゐるから、お氣の毒だと思つてゐた處、今日だしぬけに大變いゝ話が出来てきましたから、それで御相談に上つたんですよ。」

「へえ、いゝ話つて、どんなお話なんでございますか？」

「吃驚しちやいけませんよ、或るお方がね、お才ちゃんのことを聞いて大變氣の毒がつて、百五十兩のお金を出して助けてやらうと仰しやるんです。」

「えッ！」お才母娘は吃驚した。

『それ、驚いたでせう。だが、眞實の話なんですよ。』

『おかみさん、それはどういふお方で御座います？』とお才が訊ねた。

『お目に掛ればお才ちゃんの方でも大抵知つてるお人なのさ。然し、お前さん方のはうで其のお方のお金を拜借すると云ふまでは、先方のお名前は云へませんよ。』

と内儀はひどく思はせ振りをして云つた。お才は突嗟にいろく想像して見たが思ひ當る節がなかつた。母と娘は顔を見合せるばかりだつた。

『さあ、阿母さん、お才ちゃん、どうします？』

『………』

『何にも云はずに、ボンと百五十兩投げ出して下さらうといふんですよ、世の中になうまい話は金の草鞋で探したつて無からうと思ひますがね。』

『それが眞實のお話なら、こんな有難いことはございませぬけれど。』とお種は娘の顔を見い答へた。

『お才ちゃんも、勿論いなやはあるまいね？』

『はい、どなたか存じませんが、お金を貸して下さると仰しやるなら、拜借し度う存じます。』

とお才は云つた。

『やれく、それで私の役目も済んで安心しました。それぢや、今わたしの家へ其のお方が見えてゐるから、お才ちゃんに行つてお目に掛つて貰ひませうか。お金は直接にお前さんに渡して下さる筈ですから。』

『はい、それではお伴いたしませう。』

お才は何だか夢のやうな氣がしたが、然し玉川の女將がわざくやつて來ての話に笑談があらう筈はなかつた。お才は二階へ上つて手早く身仕舞ひをし、小ざつぱりしたよそ行きに着替へて、玉川の内儀と一緒に我家を出た。

お才はお客の顔を見て「はッ！」と思つた。

廣い座敷に、たつた一人で坐つてゐたのは藤岡民彌だつた。

「藤岡様、お才ちゃんを伴れて参りました、さあお才ちゃん、そんなに遠慮しないでもつと側へ入らつしやいよ。」

座敷の入口に坐つてしまつたお才を、内儀は手を執るやうにして民彌の側へ伴れて行つた。

「お才どのよく来てくれた、拙者の顔を覚えて居るかの。」と民彌はにこやかに云つた。

「はい、存じて居ります。」

お才はひどく固くなつて、顔を紅くして漸うそれだけ答へたが、此のお侍がどうして自分を救つて呉れようとするのだから、彼女には相手の眞意が解せないのだつた。

「お才ちゃん、こちら様はネ、藤岡民彌様と仰しやつて、薩摩様の御家中で大層御身分のあるお方なんだよ。」と内儀は出来るだけ勿體を付けて云つて、「藤岡様がお前さんのことをお聞きになつて、氣の毒だからお金を出して下さると仰しやるんだから、よくお禮を申し上げるがいよ。」

「旦那様、有難う存じます。」

と、お才は手を突いて云つた。

「いや、さう改まつて禮を云はれては困る、たかゞ百五十兩の金子で、人間一人が助ければ安いものだ。それにお才どの、そなたに對しては、此の民彌、それ位のこととしてはよい筋合があると思ふが。」

と民彌は意味ありげに云つた。お才には其の意味がいろ／＼にとれた。が、只黙つてゐた。すると民彌は懷中から袱紗包を取り出し、其の中から小判の包みを幾つか出して前へ置いた。

『では、爰に百五十兩あるから受け取つて貰ひ度い。此の後も金子の入用があらば何時でも云ふが宜い。』

『お才ちゃん、有難く頂いて、早くお仕舞ひなさいよ。』

と内儀は横から云つた。

『旦那様、では拜借いたします。』

お才はもう一遍禮を云つて其の金を仕舞つた。

『お才ちゃんみたいな幸福者はないよ、すんでのことに身を賣らうといふ矢先に、大枚のお金を貸して頂くなつてこんな有難いことがあるものかね、お前さん、此の御恩を忘れてはいけないよ。』

『おかみ、さう恩を被せるものではない、拙者が勝手ですることだ、はゝゝゝ。』

『とにかく、こんなお目出度い事は御座んせん。只今御酒を持つて参りますから少々お待ち下さいまし。』

内儀はさう云つて座敷を出て行つた。

二人は少しの間沈黙つてゐたが、民彌の方から口を切つた。

『どうぢや、驚いたらう。』民彌は急に碎けた態度でニコ／＼笑ひ乍らお才の顔を見て、

『よもや拙者とは思はなかつたらう？』

『はい、あなた様とは思ひませんでした。』お才も艶やかににつこりと笑つた。『でも、いつぞや花月でもお目に掛りましたね。』

と云ふと、民彌は少し狼狽の色を見せて、

『いや、あの時は飛んだ處を見られた。然し、拙者は交際で廓へもよく来るが、面白くて遊ぶのではない。』と言ひ譯らしく云つた。

『それよりも、風頭山では大變ぢやつた。』

と民彌はあの時のことを話し出した。

『拙者と河野正克と二人で話して居る處へ、そなたが前を通つた。それから間もなくあ

の事件ぢや。河野が先に走つて行つたから拙者も直ぐ後から行つたが、見ると河野は早や外國の水兵を斬つて居つた。河野は脱藩しとるからまだしもよいが、拙者はあの場合關りあふわけにはいかぬから、路を變へて遁げて了うたのだ。然し、そなたが河野と一緒に遁げる處までは確かに見届けたが、あれからそなたと河野はどうしたか？」

お才は、あの時の藤岡のとつた態度を實は今日迄餘り好感を持つて考へるわけにはいかなかつたが、然し今民彌の話を聞いて見れば彼の云ふところも無理はないと思つた。民彌としてはあの場合わざ／＼巻き添ひに入る必要もないのだ。それを民彌といふ男がひどく友情を缺いてゐるやうに考へるのは無理だつたやうに考へて來た。然し河野と藤岡との内部的の交渉についてはお才は何にも知らないのだけれども、河野のことを藤岡に知らせることは何となく好ましくないやうな氣がしたので、河野の消息については、『妾、少しも存じません。』と答へた。『でもあの場を二人で遁げたではなかつたか。』

『遁げる時は一緒に遁げましたけれど、山道でお別れして、それつきりお目に掛りません。』

『さうか——？』

と、民彌は疑ひ深さうに云つた。

『河野と拙者とは竹馬の友だ。然し、近來は彼と拙者とは大分考へて居ることも、すること異つて居るのだ。』

正克の噂が出たので、お才は彼のことを考へさせられた。

(あの方は何處に居るだらう)

そして、正克の友人である藤岡民彌に金を出して貰ふとは全く妙な因縁だと思はざるを得なかつた。然しさう思つて民彌を見ると、此の男に對して、今までと異つた親しみさへ感じるのだつた。

日が暮れてから、玉川からお才を呼びに来た。今日のことがあるから行かないわけにはいかなかった。

『お母さん、一寸行つてまゐります。』

『あゝいゝとも、ゆつくり行つておいで。』

お才は晝よりもすつと綺麗に粧つて丸山へ出掛けた。

王川の玄關を入ると、内儀が待つてゐて、

『お才ちゃん、よく来てくれたね、さあ〜お上り。』

と手を執るやうにして上へ上げた。

お才は見違へる程晴れ〜しい顔になつてゐた。

『おかみさん、今日は有難う存じました。』

とお才は帳場へ坐り込んで禮を云つた。

『それぢあ、花月のはうはすつかり形が付いたんだね。』

『はい、あのお金を持つて直ぐに花月さんへ行つて、お返し致しました。』

『さう、それはよかつたねえ。だが花月では、定めて當てが外れて力を落したことからう。』

『でも花月のおかみさんも喜んで下さいました。』

『それはいゝが、藤岡さまからお金を借りたことは云ひはしないだらうね。』

『そんなことは申しません。』

『あれは誰にも内密にしてゐなければいけないだよ。とにかくこんなことは世間に知れると蒼蠅いからね。』

『はい、其のことは承知して居ります。』

『それなら妾も安心だが——時に、あの方がね、まだお前さんに話したいこともあると

仰しやつて、あちらで待つてらつしやるから、少し行つてお相手をして下さいよ。』
『はゝ。』

と云つたが、お才は急に心配になつて來た。藤岡が夜自分を呼び付けて何を云ふのだらう？

『ホホホホ、お前さん顔の色なんか變へてどうしたのさ？ 何んでもないから心配しなくていいよ。さあ、妾と一緒においで。』

内儀はさう云つてお才をつれて帳場を出ると、廉下の途中で、
『離室にいらつしやるからね。』

と云つて其處からお才にも庭下駄をはかせて下へおりた。泉水の縁を飛石傳ひに行くと、半ば植込の蔭になつて茶席風の離室があつた。圓窓の障子にボンヤリ燈火が映つてゐるのを見ると、お才はわけもなく胸に動悸が打つて來た。

『藤岡さん、お才ちゃんが參りましたよ。』

と、内儀は襖の外から聲を掛けた。

抱一らしい茶掛のかゝつてゐる床の前に民彌は脇息に凭れてゐたが、酔つてゐるのか顔は櫻色だつた。

お才は襖の外に立つてゐた。

『まあどうしたの、この娘は、そんなに恥かしかつてさ。』

お才は無理に中へ押し込まれた。

『お才どの、よう來て呉れた。』

お才は固くなつて、

『あの、今日はまことに有難う存じました。』

『あれで形が付いたのか。』

『はゝ。』

『それは重疊々々。』

『おオちゃん、そんな處へ坐つてゐないで、旦那のお側へ行つてお酌でもなさいよ。』
『はい。』

おオは云はれた通りに酌をした。暫くすると内儀は、

『わたしは、向うに用があるから一寸行つて参ります、御用があつたらお呼び下さいまし。』

と云つて席を外して出て行つて了つた。

『おオどの、そなたも一つ飲むがよい。』

民彌は盃を差した。

『あの、妾は無調法でございます。』

『一つ位はよからう。』

民彌は無理に盃を持たせて酒をついでやつた。おオはそれを飲んで民彌に返した。すると民彌は又其の盃をおオに持たせようとした。

『もう頂けませぬ。』

『一つや二つ飲んだとて大事はない、若し酔うて苦しければわしが介抱してやるほどに飲みやれ。』

おオは仕方なしに飲んだ。顔が直ぐ紅くなつた。おオはこれ迄酒など飲んだことがなかつたから、二杯の酒でも可成り酔つた。そして苦しうな息づかひをしてゐるおオの姿を見て民彌は美しいと思つた。おオの黒い瞳の中でチロ／＼火が燃えてゐるやうに見えた。民彌は其の豊麗な肉體の各部分をむさぼるやうに眺めてゐた。

『おオどの。』

『はい。』

『お前、わしをどう思つてゐる？』

『………』

『わしはとうからお前を戀してゐたのだ。風頭山でお前を見た刹那から、わしは有りつ

たけの戀をしてゐたのだ。」

民彌は火のやうな息を吐き乍ら云つた。お才は恐ろしくなつてブル／＼慄へた。

「お前は正克と言ひ交したことがあるだらう、あるならあると、拙者に云つて呉れ。」

正克のことを云はれるとお才は思慕の情が潮のやうに盛り上つて來るのを感じた。そして只わけもなく悲しくなつて泣けて來た。

「お才、何で泣く？ それ程彼奴が戀しいのか。」民彌は嫉妬しくて堪らなかつた。

「藤岡様、どうぞお許し下さいませ。」

「許せとは、拙者の云ふことを承かぬと云ふのか。」

「妾は、あなたに従ふことは出来ませぬ。」

「いや許さん、お前はもうわしの物だ、どんな事があつても放しはせぬ。」

民彌はいつの間にかお才をしつかりと捉へてゐた。お才は逃げようとしてもがいて見たが力が及ばなかつた。民彌に對して何とも云へぬ憎惡を感じ乍ら、すでに其の力を失

ひかけた時、突然庭の方から、

「おい、藤岡氏此處に居るか。」

と、云ひながらツカ／＼上つて來た男があつた。

「やツ、これは。」

「おい、近藤君。」

「これは、飛んだ邪魔をした、平に平に。」

と、近藤昶はあつけに取られて云つた。

お才は飛び起きて、近藤の脇を駆け抜けて外へ飛び出した。

(四)

長崎から二里、丁度半島の背中合せの處に茂木港がある。長崎の殷盛に比べたら丁度孫ぐらゐにあたる港だが、然し天草通ひの船や、島原半島や肥後の熊本方面へ行く船は

何れも此港から船出をするのであつて、向うから入つて来る船も少くないから、港の中には常に船が澤山碇泊してゐて、町も繁昌するのであつた。

其の茂木の港町をウロ／＼歩いてゐる一人の田舎娘があつた。もはや七月の暑い盛りで、焼け付く太陽がカン／＼照つてゐる中を日傘も差さず、足には藁の草履をはいて、何の目的があるのか知らぬがブラ／＼歩いてゐた。さすがに日中は人も餘り歩いてゐなかつた。乾魚の匂ひがブン／＼する通りを娘は珍らしげに眺め乍ら歩いてゐた。

それは四郎島の漁師の八太夫の娘のみさであつた。

港の右手に潮見崎といふ丘があつて、鬱蒼たる樹木が立ち其處に何かの神社がある。其の邊まで来た時、さすがにおみさも暑さに堪へ兼ねたのか丘の方へ上つて行つて、涼しい木蔭を求めて息をいれてゐた。此處から見ると天草はまつたく眼と鼻の距離に見え其の巨きな姿を茫洋たる海洋の中に横たへてゐる。おみさは手拭で汗を拭いた。

先刻からおみさの後を尾けて来た男があつた。暫く物蔭から様子を見てゐたが、おみ

さがウツトリと海の景色を眺めてゐる時ソロ／＼側へやつて来て、

「姉さん、今日は暑いね。」と聲を掛けた。

「お暑いことですよ。」

と、おみさも其の男の方を見て答へた。

男は一間ばかり離れた處へ蹲み込んで腰から蓑入を抜き、燧石をカチ／＼やつて、煙草を吸ひ乍ら頻りにおみさの顔を見てゐたが、

「姉さん、あんたは何處だね？」と尋ねた。

「わたし、長崎の田舎です。」

「長崎の田舎といふと何の邊だね。」

「四郎島といふ處で御座ります。」

「ふーん、そんな島があるのかな、して、何んの用事でこつちの方へ来たすつたね？」
おみさは見ず知らずの男の方をチラツと見て警戒するやうに黙つて了つた。

『ハハハハ、これ俺が悪かつた、近付きもねえのに唐突に尋ねたからお前妙にとつたかも知れないが、俺あ決して怪しい人間ぢやない。俺の名前は源七と云つて、これでも堅氣の人間だよ。お前さんは誰か尋ね人でもあつて探してゐるやうに見えるが、さうぢやあないのかい？』

おみさは圖星を差されてしまった。

『實は尋ねる人があるのでござんす。』

『さうだらう、どうもそれに違ひないと思つた。してお前さんの尋ねる人はどんな人なんだ？』

おみさはそれには答へなかつた。

『話したつていゝぢやねえか、俺はかう見えても、人に親切こそすれ悪い人間ぢやねえからな。それに俺は世間を廣く歩いてるから、ひよつとしたらお前が尋ねる人を知つてゐないとして限らねえぢやないか。袖すり合ふも他生の縁と云ふぜ、何で其の人を探して

ゐるのだから事情を話してみなせえな。』

と、蝮の源七は深切らしく云つた。日に焼けてこそゐるが目鼻立ちの美しいおみさの顔を見て源七は素晴らしい獲物だと思つた。

おみさは、河野正克の後を慕つて島を出て來たのであつた。切支丹の此の娘の小さな胸に咲いた戀の花は、彼女を盲目にしてつて、親を捨て、島を出て來たのである。おみさは最初高島へ行つて隈なく尋ねたけれども正克に會ふことは出来なかつたので、それから長崎をはじめとして諸方を尋ね歩き、今日茂木港へ來たのである。

(若し廻り會つたところで、あの方は何んと仰しやるかわからない、そちのやうな者に用はないから歸れと云はれたつて、妾は身分が違ふから仕方がない)

とおみさは思ふけれども、もう一度正克に會ひたかつた。

『事情を話すのが厭なら、せめて尋ねる人の名前を云つて見なせえ、物は試しといふことがあから。』源七は執拗く云つた。

『それでは名前だけ申します、妾の尋ねてゐる人は、河野正克様といふお侍で御座ります。』

『河野——？』源七は何の心當りもなかつたけれど、急に思ひ出したやうに叫んだ。

『しめた、其の人なら俺が知つてゐる。』

『あらッ！ 知つとんなさると？』おみさは石の上から飛び上つた。

『知つてるとも、確かに河野——何とかいつたな。』

『正克様ですよ、二十二、三の、丈の高。』

『正克々々。それに違えねえ、丈の高い立派なお侍だ。』

『して、河野様は何處においで、御座んす？』

『それが、ソノ何んだ、つい二三日前迄此の茂木に居なすつたが、今は居ねえのだ。』

と、源七は口から出任せに云つた。おみさは居ないと聞いてガツカリ力を落した。

『それでは今何處においで、御座んすえ？』

源七は態と困つたやうな顔をして、

『どうも弱つたな、實あ河野さんから、誰にも居る處を云つて呉れるなと頼まれてゐるんだがなあ。』

『あなた、どうぞお願いですから教へて下さいまし。』

『さうかい、お前がそれ程頼むなら教へてやらないものでもないが、あの人は今天草に居るんだ。天草と云つても廣いが、俺はチャンと其の場所を知つてるのだ。處でお前がそれ程あの人に逢ひ度えなら、俺が伴れて行つてやつてもいいのだ、あッ、あの港に居る船は天草通ひだ、あれに乗りせえしたら一刻か二刻で天草へ行つてしまふから、どうだい、今からあの船へ乗つて河野さんに會ひに行く氣はねえかい。』

おみさはもう思案する餘地はなかつた。悪漢源七の口車に乗せられて飛んでもない運命へ伴れ込まれるとは知らず間もなく源七に伴なはれて天草行の帆前船へ乗り込んだ。

長崎に一つの名物が殖えた。

「おい、大徳寺の焼餅食ひに行つたか。」

「阿呆、大徳寺の焼餅なんか子供の時分から食うてるがな。」

「フン、おぬしの云ふのはたゞの焼餅だらう、焼餅は焼餅でもちつとばかり焼き手が違

ふのだ、それはまだ知るまいが。」

「焼餅なんか、誰が焼いたつて同じだらう。」

「處がさうでねえ。」

「それぢや、一體、誰が焼くのだ。」

「さう訊けば教へてやるが、おぬし、銅座小町を知つてるか。」

「お才のことだらう。」

「うん。其のお才が、今度大徳寺の境内へ焼餅店を出したのだ、お才が餅を焼いてゐるのだぜ。」

「へえ、そいつは知らなんだ、何時から始めたんだい？」

「まだ開業したばかりだが、いや大した評判だ、どうだ焼餅食ひに行かないか。」

「行くとも。」

湯屋でも結髪床でも寄ると障ると此の評判だ。

丸山の廓の上に大徳寺といふ寺があつたが、いつの頃からか寺は失くなつて名のみ残

つてゐる。其の境内は長崎の港と町とを一望の下に見る絶景だから、四季を問はず此處

へ杖を曳く客が多い。

大徳寺の名物は焼餅である。甘いあんこの入つた支那風の焼餅は上戸ではとても手の

出ない代物だが、世の中には上戸が多いやうに下戸も澤山あるから、爰の何軒かの焼餅

茶屋は昔から相當に繁昌してゐるのである。

お才は自分で餅を焼いたり、それを盆に載せてお客の處へ持ち運んだりして、甲斐甲斐しく働いてゐた。

山は秋の色に彩られて、空は拭つたやうに澄んでゐる。

お才の店には二、三人の客が腰を掛けて世間話をしてゐる。

『失禮ですが、あなたは何處からお越しで御座いますか。』

『はい、私は上方から商用で参つて居ります。』

『へえー、それぢやあ舶來の唐物でも仕入にお出でになつたんでせうが、さぞたんまりお儲けなさることですな。』

『どう致しまして、かう世の中が騒々しくなつては何の商賣も駄目ですよ。上方などは何時戦争が始まるか分らないので、戦争で焼かれて了へば元も子もなくなりますからなあ、商人は皆ビク／＼ものですよ。』

『薩州や長州では戦争の仕度をしてゐるさうですな、あつちの方から來る人が皆さう申

しますからね。』

『なあに、それあ長崎に居るはうがよく分りませなあ、何故かと云へば、近頃の戦さは鐵砲や大砲の戦さだが、日本にはいゝ鐵砲や大砲がないので、それを皆長崎の異人さんが諸藩へ賣り込んでるのですよ。就中大きな商ひをするのが大浦のグラバさんだといふことで、あの人などは大砲ぐらゐのものぢやない、軍艦をドシ／＼賣り込むのだから大したもの、軍艦一艘賣ると何萬兩といふ儲けがあるさうだから大したものぢやありませんか。』

『外國人でも智恵のある人には敵ひません。』

『其の代り攘夷のお侍に何時首を取られるか分りませんからね、金儲けも命掛けさね。』
『首を取られてはなんぼ金が出来ても仕方がない、そこへいくとお互は安心なものですて、あは／＼。』

『ハハハハ、左様々々、どれ、もうそろ／＼日が暮れさうになつたから私はお先へ御免

蒙ります。』

『やれ、私共もそろそろ歸りませう。』

と、無駄話を切り上げ、其の客は一度に歸つて行つた。

お才は其のあとを片付けて暫く腰を掛けてゐたが、もうこれから来る客も無さうだからそろそろ店を仕舞つて歸り仕度をしようと思つてゐる處へ、ブラツとやつて来た男があつた。三十餘りの色の黒いズングリした男で、紺の腹掛にも、引、何やらの印絆天を着てゐる。其の男は今し方客の歸つたあとの縁臺へ腰を掛けて、

『姉さん、焼餅が出来るかね。』

『はい、出来ます。』

『ぢやあ一人前面倒だが焼いておくんなさい。』

『畏りました。』

お才は奥へ入つて火鉢に網を掛けて餅を焼き始めた。

其の男は貰入を出してバクリ、吸つてゐる。お才は餅を盆にのせ、番茶の土瓶をそこへ持つて行つた。

『お行遠様でございました。』

と云つて、茶を注いで一寸其の側に立つてゐた。

『お客さんは大層御緩りでございましたね。』

『なに、一寸此の下まで来たもんだから寄つて見たんだが、お前さんが評判のお才さんですね。』

『ホホホホ、お多福で評判で御座いますよ。』

『いやどうして、だん、美しくおんななさるよ。』

『だん、と仰しやると、前に何處かでお目に掛りましたかしら？』

『ホイ、これあ私の言ひそくなひだ、無論お目に掛るのはお初さね、はッはッは。』と笑つて、其の男は餅を食ひ始めた。

お才は火鉢が置いてある方へ戻つた。其の時、此の境内へひよろつと入つて来たのは鳴瀧の音藏だつた。音藏は羽織の下で十手を握りしめ乍ら、蚤取眼で邊りを見廻したが直ぐにお才の店にゐる例の男の姿を見付けると、『占めた。』といふ様子をして抜き足で背後から近付いて来たが、

『野郎ツ、此處に居やがつたな。』

と、首筋を望んで、十手で風を切つて打ち下した。其の一撃を美事に食つたと思ひの外、相手の體が呼吸を計つたやうにグンと前へ飛んだので、音藏は思はず前へのめり掛けた。

『何をしやがる。』と、音藏が顔を上げる處へ、持つてゐた盆に残つて居た焼餅を掴むが否や礫打ち。

『あツ。』

眼と鼻の眞ん中へグシヤツと命中つて、餡がはみ出した儘くツ附いて了つた。音藏は

烈火の如くなつた。

『うぬツ。』と飛び掛ると相手はそれよりも速く逃げ出した。二人は境内を追ひつ追はれつして走つた。前にも云つたやうに此處は寺はなくなつてゐるが、其の址へ唐人船の船頭達が醜金して媽祖廟を建立してある。其の廟の周りを二人はいつ迄もグルグル廻り廻つてゐた。

逃げる方の男はいつまでも平氣らしかつたが、音藏のはうはやがてヘト／＼になつて了つた。さうかうしてゐるうちに音藏は相手の姿を見失つてしまつた。

『畜生、何處へ失しやがつたんだらう。』

音藏は、根氣よく境内の隅から隅まで茶見世の縁の下まで探して見たが到頭見付からなかつた。そのうちに日が暮れて薄暗くなりかけた。音藏は最後に断念したらしくお才の見世へ戻つて来た。

『お才ちゃん、水を一ぱい呉んな。』

「音藏さんお茶のはうがい、でせう。」

「お才は土瓶で茶を出してやつた。音藏は渋茶を飲み乍ら、まだ鬱憤が納まらないらしく、」

「どうも忌めいめしい畜生だ、何處へも逃けた様子はなかつたが。」と、獨り言を云つてゐる。

「音藏さん、今のは何ですか。」

「あれかい、彼奴あ播州の傳吉といふ大泥棒なんだ。」

「まあ、あの人が。」

「彼奴は先刻お才ちゃんところで何か喋りやしなかつたかい？」

「否え、なんにも。」

「音藏は何か考へてゐたが、」

「お才ちゃん、俺あ歸るからの。」

「おや、お歸りですか。」

「若しあの野郎を見つけたら報らして呉んなさいよ。」

「はい、承知しました。」

音藏は坂を下りて行つて了つた。お才は其の後から店を片付け始めた。そして何氣なく背後を振り向いて見ると、何時の間に何處から出て來たのか先刻の印絆天を着た男がニョキツと現はれて突つ立つてゐた。お才は驚いて、

「あれツ。」と魂消るやうな聲を發した。

「姉さん、恐がることありませんよ、あつしや何もお前さんに悪いことはしねえから。」

「あなた、今迄何處においでになつたんです？」

「なあに、一寸隠れんぼして見たゞけでさあ。」

と何んでもないやうに云つてニコ／＼笑つてゐる。

(この人が泥棒かしらん?)

お才は音藏が云つた言葉を思ひ出して、そして直ぐ前に立つてゐる男の顔を眺めた。

「お才ちゃん、私とお前さんに少し話があるんだが。」

「何んですか、お話つて？」

「お前さん、河野さんに逢ひたいとは思はないかね。」

「えッ！」

お才は顔の色が變つた。

「あなた、河野様を御存じですか？」

「知つてますとも、よく知つてまさあ、だからお前さんがあの方に逢ひたければ逢はせて上げようと思つてね。」

「あなた、どうぞ會はせて下さい、あの方は今何處にゐらつしやるんです？」お才は狂氣のやうに云つた。

「さう慌てたつて駄目ですよ、それ程お前さんが逢ひたいなら、今夜十時を合圖に大浦

の辨天橋迄來ておくんなさい、そしたら河野さんに逢はして上げるから。」

「きつと、きつと參ります。」

「ぢやあお約束を違へないやうにね。」

「大丈夫ですわ。」

お才は飛び立つやうな思ひで云つた。播州の傳吉は腹掛から小粒を掴み出して盆の上へザラツと置いた。

「餅の代を爰へ置きますぞ。」

「アラあなた、そんなもの。」

「商賣物を只食ふ奴はありませんや、ハハハハ。ぢやあ今夜待つてますよ。」と念を押すやうに云つて傳吉はつと出て行つた。

お才は思ひ掛けない出來事の方へ心を奪られて了つて、家へ歸ることさへ忘れてしまつたやうにぼんやりとなつた。

(正克様に會へるのだ)

正克と逢ふ場面を空想すると、體が燃えて了ふやうに熱くなつた。

(六)

お才が我家へ歸ると母親が、

「あのお才や、先刻旦那から、歸つたら直ぐ玉川へ来てくれといふお使だつたから、直ぐ行くがいゝよ。」

と云つた。

お才は困つた顔をした。

「阿母さん、妾、今夜は少し都合が悪いんだよ。」

「おや、何か用が出来たのかえ？」

「えゝ。」

お才は愚圖々々してゐて行かなかつた。すると又玉川から人を寄越してお才はまだ歸らないかと尋ねて來た。

「それぢや一寸顔を出して、早くお暇を頂いて歸つたらどうなんだえ。」

と母親に云はれてお才も、さう云へばまだ日が暮れたばかりで十時には大分間もあるから、其の暇に行つて來ようと思つた。何から何まで世話をして貰つてゐることを思ふとさう勝手なことも出来なかつた。

玉川はもう行きつけてゐるので家のやうに親しかつた。

「今晚は。」

と帳場へ聲を掛けたばかりで、例の離室へ行つて見ると、民彌は若い藝子を二三人呼んで遊んでゐた。

「皆さん、今晚は。」

「今晚は。」

藝子達はお才に挨拶をして席を譲つた。お才は民彌の側へ行つて坐つた。見ると民彌は大分酩酊してゐた。

「お才ちゃん、あなたの來やうが遅いもんだから、ふう様が焦れて、おかげで妾達が叱られましたよ。」

「それは済みません。だが、ふう様が焦れるのは、妾のためぢやありませんわ。」

「でもあなたが來たら、これこの通りおとなしくなつたぢやありませんか。さあ妾達は歸りませう。」

と、藝子達は氣を利かして直ぐに引き退つて了つた。

民彌はまつたく不機嫌な顔をしてゐた。

「民彌様、どうかなさいましたか。」

お才は男の膝へ軽く手を掛け乍ら顔を覗き込んだ。

「どうもせぬわ。」

「それなら何故そんなむづかしい顔をしてゐらつしやいますか？」

「お才、酒を飲まう。」民彌は盃をとり上げた。

「もうお止しなされませ。」

「何故注がぬ。」

「もう大分召し上つてゐるのに、あんまり過ぎてはお毒ですもの。」

「ハハハハ、そちは俺の體を心配して呉れるのか、それは口先ばかりだらう。」

「何故そんなことを仰しやるのです、妾がいつ貴郎に不實をいたしましたか？」

お才は向き直つて美しい眼で民彌の顔を睨んだ。それは半年前の彼女には嘗て見られない妖艶さであつた。

「それを仰しやいまし、さあ。」

「それ／＼、そちの其の眼の底に不實が閃めいてる。俺にはよく判る、拙者はいろんな女の氣持を知つてるからな。」